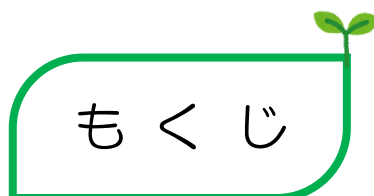
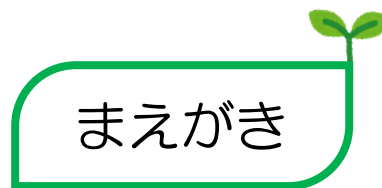


私たちが大切にしたい心の育ちとは
🌸 ~語り合いから始めよう~ 🌸

京都市子育て支援総合センター こどもみらい館
第5期研究プロジェクト



まえがき.....	2
話し合いについて.....	3
心の育ちを読み取ろう ミニエピソード集	5
ミニエピソード	
① 一緒にしよう	6
② 蓄積されてきた心の育ちと嬉しいハプニング	8
③ わがままじゃない	10
④ 一緒にやってみたいなあ	12
⑤ はなこちゃんの「できた！」	14
⑥ 先生、手伝って	16
⑦ やってみよう！	18
⑧ 頑張ってやってたのに	20
⑨ ラグビーのチーム分け	22
⑩ 僕を見て！何でも一番すごいだ！！	24
⑪ ビー玉ぬすんじゃいました	26
検討会でポイントとなる視点.....	28
子どもへの理解を深めよう エピソード集	31
エピソード	
① 一緒にしよう	32
② 蓄積されてきた心の育ちと嬉しいハプニング	34
③ わがままじゃない	36
④ 一緒にやってみたいなあ	38
⑤ はなこちゃんの「できた！」	40
⑥ 先生、手伝って	43
⑧ 頑張ってやってたのに	47
⑨ ラグビーのチーム分け	49
⑩ 僕を見て！何でも一番すごいだ！！	52
⑪ ビー玉ぬすんじゃいました	55
検討例.....	58
おわりに 大倉得史（京都大学大学院教授）.....	60



まえがき

研究プロジェクトとは



こどもみらい館では、平成16年度から研究プロジェクトを実施し『保育の質の向上と保幼小連携』と『子育て支援』の二つを柱として、研究を進めてきました。その中で、目には見えない心の育ちがすべての土台となる最も大切なものとして研究に取り組んできました。心の育ちには、子どもの思いを受け止め、その子が「ありのままの自分でいいんだ」「自分は大切な人なんだ」と感じられるよう温かく包み込む周りの大人との関係が重要です。そして、子どもが成長し小学校という階段を上がる時、子どもの心の育ちの連続性に考慮し、園と学校の先生の子どもに対する心の持ち方が重要なのだと気付きました。

子育て支援についても、保護者の思いを保育者や教師が心から受け止め寄り添うこと、そして、保護者の悩みに対して共に試行錯誤しながら歩もうとすることの中にこそ、その本質があるとの考えにたどり着きました。

第5期研究プロジェクトでは、これまで積み重ねてきた研究の中でテーマとしていた『子どもの心の育ちと保幼小連携・接続』と『子育て支援』は共通する部分が多く見られ、絡み合い切り離すことができないと実感し、一本化して取り組むこととしました。

第5期研究プロジェクト



『私たちが大切にしたい心の育ちとは ～語り合いから始めよう～』をテーマに研究してきました。メンバーがエピソードを書き、検討する中で、一人一人の子どもの心の育ちに目を向け語り合ってきました。その中で、保育者や教師の気持ちが徐々に変化していったように思います。

やらなかったことをやるようになった、できなかったことができるようになった、それは本当の意味での成長だといえるのだろうか。メンバーが様々な意見を交わす中で、思いもやらなかった視点や気づきがあり、子どもへの理解が深まりました。「あなたは、あなたのままでいいんだよ」そんな思いで、子どもを見守り、関わってあげたいと思います。

この研究内容を伝えるために、エピソードを掲載した冊子と検討会のDVDを作成しました。保幼小の先生方が、この冊子を使って語り合い、子どもを多面的に捉え関わることで、より豊かな子どもの育ちが保障できればと願っています。

保育・教育の質の向上のために、活用していただければと思います。



話し合いについて

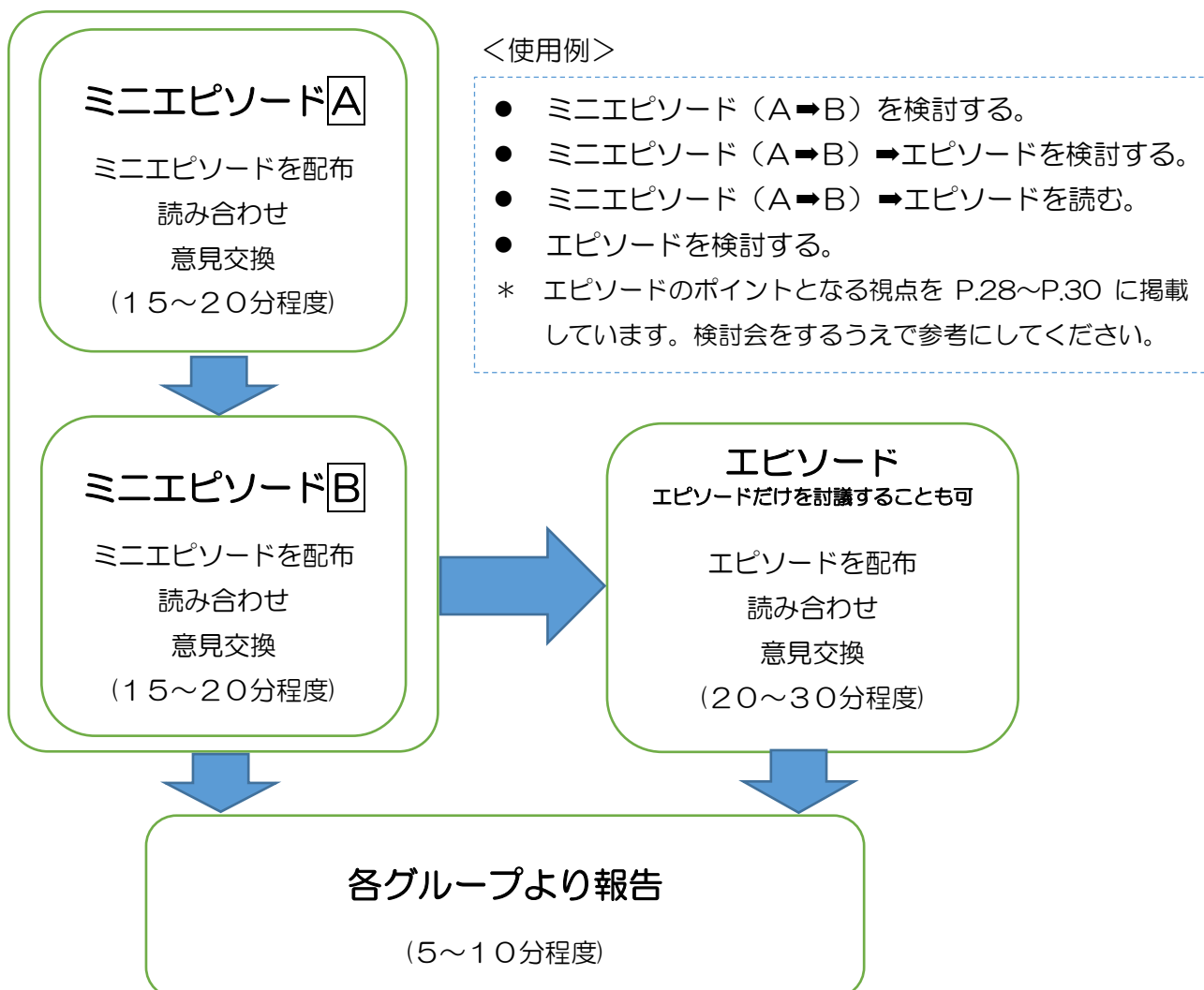
➤ 方法

- 所要時間 30分～60分程度
(人数に合わせて話し合う時間を調整)
- 形式 グループ討議
- 形態 3人から5人程度のグループ

➤ 実施時の約束

- 他者の意見を聞いて学びましょう。
違いに気付くことや自分を振り返ることが、子ども理解や保育・教育のヒントになります。
- お互いの意見を尊重しましょう。
どの人の意見も公平に扱われ、保育・教育の経験年数などでその重みは変わりません。
- この話し合いには正解はありません。
間違いもありませんので、臆することなく、感じたことを出し合しましょう。
- 参加者みんなで意見交換できるようにしましょう。
全員が発言できるように意識し、1人の人が喋り過ぎないようにしましょう。

➤ 流れ





心の育ちを読み取ろう ミニエピソード集

ねらい

エピソードは、日常の子どもとの関わりやそのときどきの保育者や教師の思いを記述していきますが、一つのエピソードを読み合い、お互いの意見を交換することで、1人の子どもを様々な角度から捉えることができます。子どものそのときの行動をどう感じ、どう捉えるかは、人によって違います。他の保育者や教師の考えを聞くと「そうだったのか」と気付いたり「そういうふうにも考えられるのか」と新たな視点で見たりすることができます。それらには、正解も間違いもありません。他者の意見を聞き、子どもを多面的により深く捉えることが、見えない心の育ちを皆で共有する方法になると考えます。

心の育ちを読み取ろう…ミニエピソード集では、読みやすく簡素化したエピソードを掲載しています。短時間で検討会を実施できます。

<ポイント> (P.28) をご覧になると、それぞれのエピソードの視点がわかります。ファシリテーションの参考にしてください。

A 一緒にしよう

背景 1

あおいちゃんは、3歳児の女児で両親と3人で暮らしている。父親の仕事の都合で4月に引っ越してきた。初めて集団生活を送ることになったあおいちゃんは、母親に抱っこされて登園する。登園しても母親から離れられず、母親もあおいちゃんを抱いたままでなかなか手放すことができない。昨夜のことや健康状態などを聞く時間をとることで、あおいちゃんが泣いていても預かれるようになった。入園前は母親と家の中で過ごすことが多かったことを聞き、集団での経験を増やしていきたいと思った。

保育室では、先に登園してきた子どもたちが思い思いに遊んでいる。その様子を見ただけであおいちゃんは泣いてしまう。私（担任）の服をぐっとつかみ一日中その状態で過ごす。私が保育室から出るときは、代わりの保育者の服を離さないということも続いた。母親があおいちゃんの体調が気がかりとの理由で欠席が多く、夏が過ぎてもこのような状態だった。

エピソード 1

9月のある日、他の子どもがビーズのひも通しをしている遊びに興味を示したが、近づくことができない。私が「あおいちゃん、ビーズしたい？」と聞くと、あおいちゃんは「したい」と答えてくれたが、笑顔はなく足は動かない。最近では短い言葉で思いを伝えられるようになってきた。私がそばにいれば泣くことは減り、服をつかんだまま子どもたちが遊んでいる様子を見ることも増えた。うまく友だちの遊びの中に入ることができればと思っていたので「先生と一緒にしようか」と手を出して誘うとあおいちゃんは「うん」と答えて歩きだした。あおいちゃんにとっては、子どもの輪に入るのもビーズ通しも初めてだった。私はあおいちゃんの隣に座り「こうするんだよ」と1つビーズを通し渡した。あおいちゃんは、ビーズを1つ手に取ってひもに通すと顔を上げて、はにかんだように微笑んだ。その後は他の子どもがしているのを見ながら、嬉しそうにいろいろなビーズを通していった。



思いを巡らせてほしいポイント

- あおいちゃんは、なぜこのような状態なのでしょう。
- あなたなら、これからあおいちゃんにどのように関わっていきますか。

B 一緒にしよう

背景 2

4歳児になって、室内では保育者から離れても友だちと遊べるようになったが、園庭では私のそばにすることが多く、砂場やブランコに行くときは「一緒にしよう」と私の手を引くあおいちゃんだった。

子どもたちが思い思いの遊びを楽しんでいたある日、あおいちゃんはクラスの友だちと園庭に出てきたが、私がないことに気づきその場に止まってしまった。私が遅れて出ていくと、走ってきて黙って手をつないできた。あおいちゃんがこわばった表情をしていたので私は“不安だったんだろうな”と思った。そして、いつものように「(ブランコを)一緒にしよう」と言ってくるかなと思いながら、手をつないでブランコの方に歩いていった。

エピソード 2

年下の子どもが、平均台に上ってみたものの慣れない様子で1歩、2歩とふらつきこわごわ進んでいた。私はあおいちゃんの手をつないで平均台へと向かった。平均台のそばに来るとそっと手を放し、年下の子どもに手を差し出した。その子は私の手を持つことで、ゆっくりと渡りきることができた。私は手をたたきながら、その子とあおいちゃんに「やった。すごいね」と声をかけた。渡り切った子どもは緊張した顔から笑顔となった。じっと見ていたあおいちゃんの顔もパッと明るくなった。他の子どもが『頑張ったこと』と一緒に喜んでくれているあおいちゃんが愛おしくなった。

平均台のスタートのところに、他の子どもたちが待っていた。私は“今ならあおいちゃんが他の子どもに関われるかもしれない”と思い「あおいちゃん、先生みたいに、小さい友だちのお手伝いしてくれるかな」と話しかけた。あおいちゃんはずなずき、待っている子どものところに走っていき手を差し出した。平均台を歩く子からも、手をつなぐあおいちゃんからも一生懸命が伝わってきた。平均台を渡りきるまでの少しの間が、とても長い時間に思えた。あおいちゃんが自分から友だちに関わりを持ってたことが嬉しかった。「『やったー、すごいね』って一緒に喜んだらいいんだよ」と伝えると「うん」と力強く返事をして笑顔を見せた。その場にいるみんなの手をたたいて喜び合った。



思いを巡らせてほしいポイント

- あおいちゃんが私の誘いかけに答え、小さい子に手を差し出したのは、それまでにどのような関わりがあったからなのでしょう。
- その後、あなたならさらにどのような関わりや働きかけをしますか。



元になるエピソードが P.32 にあります。

A 蓄積されてきた心の育ちと嬉しいハプニング

背景 1

しょうくん（3歳児，男児）は，父・母・兄2人の5人家族。それまで行っていた園で集団生活に馴染みづらいついと言われ転園し，3歳児クラスの4月に入園した。母親は「集団生活ができない」「友だちができない」「周りに迷惑をかけるのでは」と不安なことが多く，運動会などの行事も欠席されていた。

入園当初は，常にリュックを背負い「帰る」と保育室から出て行こうとしていた。人とのやりとりはまだ苦手で，友だちと関わろうとはせず，思いが通らないとすぐに怒っていた。給食のときは苦手なものが多く，人と一緒に食べることが嫌で，机の下にもぐって食べていた。少しずつ私（担任）の膝の上に座れるようになり，5月には1人で座って食べるようになったが，人と対面に座ることができなくて，壁に向かって1人で食べていた。

エピソード 1

6月，印象的な出来事があった。クラス全員（14名）でホールに行き『とんとんとん何の音』をして遊んでいた。しょうくんはホールの隅のろく木の上にいた。みんなが遊んでいる様子に聞き耳を立て，楽しそうな声や子どもたちが追いかけているのを魅力に感じて段々と近づいてきた。そこで私が「何の音？」と問いかけると，しょうくんは「うんち！」と答えた。するとみんなが大笑いした。その反応が嬉しく，そこから追いかけてこにも参加した。しかし，友だちと上手く関われず叩いてしまったり，ぶつかったりしてしまう。そこで私はぶつかり合いから『相撲ごっこ』に展開してみようと考えた。相撲の体当たりがしょうくんの刺激にもマッチしてこの日は30分近くクラスのみみんなと遊んだ。このとき相撲ごっこをしてよく遊んだのがひろとくんだった。

思いを巡らせてほしいポイント



- 私は，何を印象的だと捉えたのでしょうか。
- しょうくんは，どういうところに困っているのでしょうか。
- このような子どもに，どのように関わりますか。
- 母親はどんな思いで過ごされていたのでしょうか。

B 蓄積されてきた心の育ちと嬉しいハプニング

背景 2

3歳児クラスでは、私との信頼関係を基盤に少しずつ友だちとの関係を積み重ねていった。特にひろとくんには、描いた絵をプレゼントしたり、ひろとくんとなら手をつないで歩けるなど特別な存在になっていた。しょうくんは、4歳児クラスに進級。3歳児のときから、しょうくんの居場所となっている段ボールの囲いを拠点に活動が広がっていった。しかし鬼ごっこの心構えができておらず思ってもいない瞬間にタッチされたときや、午睡から1番に起きたかったのに、他の友だちの方が早く起きたときなど、自分の思い描いていたイメージと違ったときには受け止めきれずに「時間を戻せ～！！」と激しく泣いてなかなか立ち直れないことも少なくなかった。私はそんなしょうくん実際に時計の針を戻したり、じっくり話を聞いたりして、受け止めて対応してきた。

エピソード 2

9月に保育実習生がしょうくんのクラスに入った。給食時、その実習生は気付かずに、しょうくんがいつも壁を向いて座っている特等席に座っていた。少し遅れて食堂にやってきたしょうくんは、いつもの自分の席に実習生が座っていて一瞬困った顔をしていた。私はしょうくんがどうするのかと見守っていた。しょうくんは周りを見渡して、すぐにひろとくんを見つけた。そしてひろとくんの隣の席が空いているのを確認すると、すぐにそこに行って座って食べ始めた。私は奇跡的な瞬間だと思った。その日からひろとくんの隣の席にいつも座り、他の友だちとも机を囲んで給食を食べられるようになった。ちょっとしたハプニングから、それを受け入れ新しい形をつくったしょうくんの姿に心の育ちを感じた。

思いを巡らせてほしいポイント



- しょうくんの中で、どんな思いが蓄積されたのでしょうか。
- 実習生が自分の席に座っていたときに、しょうくんはどう考えたのでしょうか。
- 実習生がしょうくんの特等席に座っているとき、あなたならどうしますか。



元になるエピソードが P.34 にあります。

A わがままじゃない

背景 1

私（園長）は、たかしくんが4歳児になったばかりの頃に出会った。いつも大勢の子どもたちの元気な声が聞こえていたが、たかしくんの声を聞くことがなかった。いつ見ても部屋では、静かに1人で遊んでいるか友だちの様子を眺めていた。私は“どんな声をしているのだろう”と思っていた。また、たかしくんは乳児の頃から、偏食がきつく食べられるものが決まっていた。白ご飯はなんとか食べられるが、おかずは保育者が何度も促してやっと数口食べる程度であった。

エピソード 1

たかしくんは食事の時間になると困った顔をしていた。同じみそ汁といっても、中に入れる具材によって味が異なったり、日によって具の煮え具合で噛み応えが違ったりしている。ご飯の炊き加減などでも食感が違う。担任が、たかしくんは食感の苦手さがあることに気づき『お味見』として、量を減らす前に、見た目だけでなく味見をして食材の味や食感を確認できるようにし、毎回の減らす量を一緒に決めていた。

思いを巡らせてほしいポイント



- このときのたかしくんの気持ちは、どのようなものでしょうか。
- あなたなら、たかしくんにどのような関わりをしますか。

B わがままじゃない

背景 2

会議で担任から、どうすればたかしくんは楽しく食事ができるのかという悩みが出された。給食を目の前にして「どれを減らしてほしいか」と尋ねられる気持ちはどうだろうという話になり、初めから食器を空にして、自分で食べる量を決めてもらったらどうだろうという提案があった。食べられないから減らすのではなく、自分で食べる量を定めるようにしてみようと『お味見』に加えて、この取り組みをすることが決まった。

エピソード 2

空っぽの食器セットにたかしくんは少しだけ選び取って食べるようになった。取り分けた量がほんの一口であっても、食べきったことを認めていくようにした。たかしくんにとって以前と違うことは「全部食べたよ」と言えることであった。担任に空っぽになった食器を持ち上げ見せびらかし、少し得意げであった。

この取組が続いたある日、私は今まで聞いたことのない楽しそうな声を聞いた。それはたかしくんが、廊下で担任を呼んで早く園庭に行こうと誘っている声だった。こんな声なのかと改めて知り、今から遊ぶぞと意欲満々で走っていく背中を見て心が温かくなった。

思いを巡らせてほしいポイント



- 空っぽの容器は、どのような意味があったでしょうか。
- たかしくんの様子が変わっていったのはなぜでしょうか。



元になるエピソードが P.36 にあります。

A 一緒にやってみたいなあ

背景 1

さとしくん（5歳）は3月生まれの男児。父・母・兄との4人家族。昨年3月に兄が卒園してから登園時に母親と離れにくい様子が見られるようになった。思い通りにいかないことがあると私（担任）を叩いたり、噛んだり、思いを行動で表すことがあり、私はさとしくんに言葉をかけ気持ちが落ち着くのを待ったり、周りの様子を伝えたりしていた。自分から話すよりも声をかけてもらうのを待っている様子が多く、誘いかけると友だちと追いかけてっこをし、楽しそうな姿に嬉しく思う日もあった。でも自分からはなかなか動こうとせず、園庭で遊んでいる友だちを1人で眺めている姿をよく見かけた。

エピソード 1

この日もさとしくんは、友だちの遊ぶ様子を座って見ていた。私は遊びに誘ってみた。いろいろ声をかけながら私は傍にいたりようちちゃんと遊び始めた。さとしくんは見ているだけで入ってくる気配はなかった。

そこで私はりようちちゃんと、フープを並べ両側からスタートし、ジャンケンに負けると最初の場所まで戻ってもう一度スタートする繰り返しの遊びを始めた。さとしくんを見ると座ってこっちを見て微笑んでいた。“気になっているかも”と思い「さとしくんも入って。先生1人だと負けちゃう」「さとしくん、こっちに並んで待って」とりようちちゃんと2人で時々声をかけた。ふと振り返ると、いつの間にかさとしくんが私の真後ろのフープの中に立っていた。私は驚き、さとしくんが“やってみたい”と遊びに入ってきてくれて嬉しく思った。



思いを巡らせてほしいポイント

- 1人で友だちの遊ぶ様子を見ている姿には、どのような気持ちがあったのでしょうか。
- このときは、なぜ遊びに入れたのでしょうか。

B 一緒にやってみてほしいなあ

エピソード 2

私は「さとしくん、助かる～お願い」と、りょうちゃんとジャンケンができるように声をかけた。さとしくんは抵抗なくジャンケンをしていた。日頃ジャンケンをするとき、手を出すこともためらうことがあったので驚いた。次第に他の子どもたちも入りだし、私は“人が増えたらさとしくんはどうするだろう？”と気になりながらも見守っていた。でもさとしくんは、人数が増えても最後までジャンケン遊びを続けていた。気付くと急いで友だちの後ろに並ぶ姿や勝って嬉しそうに笑う姿があった。

みんなと保育室に戻っていくさとしくんは、少し和らいだ表情を見せていた。自分から遊びに入れたことが嬉しく、私は「さとしくん、ジャンケン強かったなあ、また一緒にやろうね」とだけ声をかけた。

思いを巡らせてほしいポイント



- 遊びを続けていた姿には、どのような気持ちがあったのでしょうか。
- 保育室に戻るとき、あなたならどのような言葉をかけますか。
- なぜ保育者は「さとしくん、ジャンケン強かったなあ、また一緒にやろうね」とだけ言葉をかけたのでしょうか。



元になるエピソードが P.38 にあります。

A はなこちゃんの「できた！」

背景 1

はなこちゃんは、教育熱心な両親のもとで育てられている一人っ子の5歳児。他の園から転園してきた。今までは“自分はなんでもできる”と思っていたようだったが、自分よりいろいろなことができる子どもたちと出会い戸惑っている様子が見られた。また、やる前からその遊びを避けるなど、できる・できないにこだわっている姿も見られていた。私（担任）に甘えたり、自分の思いを素直に出したりすることも少ないように感じ“はなこちゃんとの心の距離をどのように詰めていけばいいのだろう”と思っていた。

エピソード 1

5歳児のプール遊びということもあり、周りの子どもたちがどんどんチャレンジしているのを横目に、転園してきたはなこちゃんは日に日に表情が曇っていった。一番仲良しで同じようにバケツなどのおもちゃで遊んでいたあいちゃんが顔をつけて泳げるようになると、ますます表情が硬くなって、6月の最終週にはプールの端で身動きすらしなかった。“顔をつけたいと思っているのだな”とはなこちゃんの姿を見取った私は、なんとかそうできるようにと関わっていた。しかし、水面の直前で怖くなってしまおうのかキュッと体が固くなってしまっていた。はなこちゃんの表情を見ながら「こんな風にやってみる？」と顔をつける私自身の姿を見せたり「大丈夫だよ」と励ましたりしたが、表情ひとつ変えずに立ったままだった。



思いを巡らせてほしいポイント

- はなこちゃんの表情がどんどん曇っていくのは、どのような心の動きからでしょうか。
- あなたなら、どのように関わりますか。

B はなこちゃんの「できた！」

背景 2

家ではお風呂の時間に、洗面器に顔をつけようとしては「できない！」と八つ当たりをして泣いていたようだ。また、両親もどうやったら泳げるようになるのかとスイミングスクールへの入会を検討されていた。相変わらずの暗い表情で、全くプール遊びが楽しめないはなこちゃんだった。

エピソード 2

同じく水が苦手なしんじくんがビート板を使って「泳げた！」と大興奮していた姿をヒントに「はなこちゃん、ビート板使うとお顔つけなくても浮けるんだよ」と伝えた。はなこちゃんは無言でビート板を受け取った。プールの時間の最後に『洗濯機（ぐるぐる走って水流をつくる遊び）』をしたときに、はなこちゃんはビート板を使って初めて水に浮いた。私が「すごいやん！」と声をかけても表情は変えなかったが、その後自ら「ビート板を使って遊びたい」と楽しむようになった。最終日まで『泳ぐ・もぐる・顔をつける』ということは無かったが“はなこちゃんの「できた！」”を味わうことができたのではないかと思う。



思いを巡らせてほしいポイント

- 微動だにしなかったはなこちゃんの心は、どうして動いたのでしょうか。
- このとき私は、はなこちゃんがどうなってほしいと願っていたのでしょうか。
- 「できた」ことそのものではなく「頑張ろうと思えた」ことを誇らしく思えるような関わりとは、どのようなものでしょう。



元になるエピソードが P.40 にあります。

A 先生、手伝って

背景 1

たいちくんは5歳児で、父、母、たいちくんの3人家族。私は4歳児からの担任だが、たいちくんは4歳児の頃からすでに身辺自立していたため、私との一対一での密な関わりは少なかった。鬼ごっこやリレー、ゲームなどの勝負事が好きで、進んで遊びに参加するが、負けず嫌いで、プライドが高く、負けると相手を怒ったり強がって逃げたりすることがよくあった。“ありのままの思いを素直に出したり、勝ち負けにこだわらず人と関わって遊ぶ楽しさを感じたりしてほしい”と願い、たいちくんの思いを代弁しながら関わってきた。5歳児になると4、5人の男児と仲良くなり、いつも一緒に氷鬼をして遊んでいた。

6月末に親子で竹馬をつくったが、難しそうに感じたのか、一度も自分からは竹馬に触ろうとしなかった。9月に入り、挑戦する子が増えてきたが、たいちくんたちはひたすら氷鬼をしていた。氷鬼が楽しくてやりたいというよりは、竹馬に挑戦してみようという気持ちが出なくて、それを感じている子ども同士で集まっているように私は感じたので、きっかけになればと『チャレンジタイム』と称し、クラスみんなで取り組む機会をつくった。その中で、私はたいちくんとの一対一の関わりを大事にしたいと思っていた。

エピソード 1

9月中旬、たいちくんたちは気になりつつも好きな遊びの時間には、竹馬遊びをしようとはしなかった。『チャレンジタイム』になると、いつも一緒に遊ぶ友だちが「1人でできひん…」と私に言いに来た。私は「大丈夫！先生に言ってくれたらいつでも助けるし！」と伝えると「先生持って」と言った。それを見て、たいちくんも初めて「先生、手伝って」と言ってきた。私は、たいちくんが自分の苦手なことを素直に出してくれたことが嬉しく、その気持ちを受けとめて時間のある限り関わろうと思った。その日は順番に助けに回り、たいちくんと2回一緒に歩いた。緊張して全身に力が入りながらも頑張って取り組んでいた。私は、たいちくんに「難しいけど、先生手伝ってって自分から言って挑戦するのがすごい！今日も頑張ったやん」と力を込めて伝えた。

思いを巡らせてほしいポイント



- 竹馬を触ろうとしなかった間、たいちくんはどのような気持ちでいたでしょう。
- なぜ、初めて私に「手伝って」と言えたのでしょうか。
- あなたならどう関わりますか。

B 先生，手伝って

背景 2

数日後，運動会に向けてどんなことをしたいかクラスで話し合い，その中で私は「これやってみようって自分から挑戦するのが大事」という話をした。その日の午後，たいちくんは初めて好きな遊びの時間に自分から竹馬を持って来て取り組む姿があった。

エピソード 2

たいちくんが私に竹馬を支えるよう頼んできた。私は自分から勇気を出して取り組もうとする姿が嬉しかった。何度も取り組むうちに上達していたので「力が軽くなってきたよ！いい感じ！」と伝えると，たいちくんは「初めて足挟めた」と嬉しそうに言った。プライドや理想が高いたいちくんが，初めの小さな1歩を自分で認められたことに感動した。降園前にもう一度「今日頑張ったな」と声をかけると，足を挟めたことをまた嬉しそうに伝えてくれた。翌日からたいちくんは，好きな遊びの時間に1，2歩を目標に繰り返し挑戦していた。ある日，あきちゃんが竹馬に乗りながらたいちくん「早歩きの方が歩きやすいで」と声をかけた。それまで女兒の発言に耳を傾けるようなことが無かったたいちくんが，アドバイスを受け入れて何度か試みているのに驚いた。何回目かでトントンと2歩自分で歩くと「乗れた…！」と嬉しそうな声が漏れた。私とあきちゃんや周りの子どもたちは一緒に喜んだ。まだ恐怖心と足の痛さがあり，その日はその1回きりだったが，たいちくんには満足そうな表情があった。

思いを巡らせてほしいポイント



- 私はどのような思いで，たいちくんを見ていたでしょうか。
- たいちくんがあきちゃんの言葉を受け入れられたのは，どうしてだったでしょうか。またその後，友だち関係はどう変わっていったでしょうか。
- 二つのエピソードを通して，たいちくんの心にどのような変化があったでしょうか。



元になるエピソードが P.43 にあります。

A やってみよう！

背景 1

かずきくんは、父、母、姉（小学校5年）、弟（0歳）の5人家族である。姉は面倒見がよく、小さい頃から身の回りのこと（生活面全般）をしてもらうことが多かったかずきくんは自分でしなくても全てを終えられるような状態だった。そのためか、園でも受け身で、着替えなど自分でするまでに時間がかかることが多かった。体を動かすことに苦手意識があり、鬼ごっこなどの集団遊びにもほとんど参加しない。また、プライドも高く、できない自分、かっこ悪い姿を見られたくない、そんな自分を認めたくないという思いが強く、余計に体を動かす遊びに参加しないように見えた。

5歳児の9月、運動会が近くなり、鉄棒、跳び箱、縄跳び、竹馬の中から2種目以上は挑戦しようとクラスで話していた。

エピソード 1

自由遊びのとき、園庭で跳び箱をしたい5歳児数人が楽しんでいた。その中には、跳び箱が得意で軽々跳んでいる子や、まだ自分で納得がいかず何度も挑戦している子など様々な子どもがいた。私（担任）は、まだ思ったようにうまく跳べていない子どもを中心に励ましながら跳び箱の補助をしていた。するとかずきくんが、跳び箱の助走ゾーンを何度か横切るように通っていった。私は「危ないから、ここは通らないでね」と伝えたが、また横切っていった。「跳び箱する？」と尋ねると「しない！」と答えながらも、跳び箱をする友だちをちらちらと横目で見続けていた。



思いを巡らせてほしいポイント

- かずきくんは、どのような気持ちでいたのでしょうか。
- あなたなら、どのように関わりますか。

B やってみよう！

エピソード 2

その後、跳び箱をしていた子どもたちが他の遊びへ移り、誰も跳び箱のそばにいなくなった。“誰もいない今ならやる気になるかもしれない”と思い、もう一度かずきくんを誘ってみた。すると“しかたないなあ”という表情をしながら跳び箱を始めた。私はその“しかたないなあ”の表情が“とてもかずきくんらしいな”と思いながら、まずは跳び箱に跳び乗ることからやってみて、少しずつ「できた！」の経験が重ねられるように関わった。

その後もやりたくないときには見守り「できた」の経験を重ねる中で、次第に仲のいい友だち数人と一緒に跳び箱をするようになり、自分から「跳び箱したい」と言うようになった。そして、竹馬や鉄棒など他の種目にも挑戦するようになっていった。

思いを巡らせてほしいポイント



- どうして個別な関わりで、前向きな気持ちになれたのでしょうか。
- なぜ、かずきくんは“しかたないなあ”という表情をしながら跳び箱をしたのでしょうか。
- なぜ、他の種目まで挑戦する気持ちになったのでしょうか。

A 頑張ってやってたのに

背景 1

5歳女児のなぎさちゃんは、クラスの友だちと遊ぶことが少ない。つくったりかいたりするのが好きで、遊びに気が向かなくなると「〇〇ちゃん、片付けしていない」「〇〇くんが順番抜かしをした」など友だちの指摘ばかりをする姿があった。発達的に幼く、人の気持ちを感じるのが苦手なところがあった。そんななぎさちゃんとの関わりを私（副園長）は、担任から聞いていた。「今日も友だちに意地悪なこと言って、けんかして大泣きでした…」など困っている発言が多かった。私が「先生、なぎさちゃんのことかわいいと思ってる？」と聞いたところ、担任は「……………」と声を詰まらせていた。

エピソード 1

私がクラスに行ったとき、なぎさちゃんは毛糸の編み物をしていて、編み目がとんでいて、修正がきかない状態であった。担任が「なぎさちゃん、やり直さなあかんし、はずすね」と声をかけていた。担任が休憩に行くので、そのやり取りを引き継ぎ、なぎさちゃんの編み物の修正を始めた。

枠から毛糸を外し、もう一度できるように準備していると、なぎさちゃんは、その毛糸を机の下に放り投げた。“なぎさちゃんのために毛糸の準備しているのに、なんでそんないらんことすんの？”という感情が沸き上がった。

思いを巡らせてほしいポイント



- 子どもをかわいいと思えないとき、それは何が原因になっていると思いますか。
- そんなとき、あなたならどうしますか。

B 頑張ってやってたのに

エピソード 2

その思いをこらえて「先生、なぎさちゃんの直したいんだけど？」と優しい口調で話しかけた。すると毛糸の色の順番を修正するように訴えてきた。私はなぎさちゃんの言うとおりに赤色の毛糸を付け始めたが、今度はそばにあった毛糸をけりだした。落ち着いた口調で「それは困るわ」と言ったが自分の憤りが漏れていたのか、なぎさちゃんは座り込み私の背中では泣き続けた。“あー、また同じことになってしまう”と困っていたときである。“もしかして、毛糸を枠から外す段階でくじけていたのかも？”と思い「なぎさちゃん、頑張ってつくったけど、やり直しになったから悲しいの？」と聞くと「うん」と頷いた。「なぎさちゃん頑張ってたもんね、今日はもうやりたくない？」と聞くと「うん」と言うが、そばを離れずにいた。しばらくして、表情が明るくなり「赤色から始める。先生手伝って」と話しに来た。なぎさちゃんは私の膝の上で編み物を続けた。会議のためその場を離れたが、おやつの後、部屋をのぞくと再び毛糸の編み物をしている姿があった。「なぎさちゃん、上手にできてるね」と声をかけると「うん」と弾んだ声で返事があった。その後、黙々と編み物をしていた。

思いを巡らせてほしいポイント



- なぎさちゃんの気持ちは、なぜ立ち直ったのでしょうか。
- なぎさちゃんの思いをより深く考えられたのはなぜでしょう。



元になるエピソードが P.47 にあります。

A ラグビーのチーム分け

背景 1

やすおくんは5歳児の男児，父，母，姉，兄，やすおくんの5人家族。日頃から仲の良い友だちと運動遊びで盛り上がっているが，負けたり，転んだりすると機嫌が悪くなることもあった。運動遊び以外では慎重になる一面もあるが，友だちを引っ張っていける力があり，自己中心的な価値観の殻が破り切れていない姿に少しもったいなさを感じていた。

私（担任）は，自分たちで遊びを準備し，進めてほしい時期に来ていると考えていたが，その中でやすおくんは仲が良く，運動もできるたかしくんと常に同じチームになって自分のチームが強くなるように誘導するなど勝手に決める姿がちらほら見られていた。

エピソード 1

みんなでラグビーをしようと，やすおくんが中心になってチームを決めていた。ラグビーが始まると，明らかにチーム編成が偏っており，やすおくんがいるチームが一方的に点を取り続けていた。私はやすおくんに友だちの思いを伝えるチャンスと捉えしばらく見守っていた。すると友だちが1人2人と抜けていき，ラグビーが成立しなくなった。そのタイミングで私はやすおくんに「今，すごく怒った顔で向こう行かあったけど，どうしたの？」と問いかけた。「みんなでラグビーしてたら，みんなやめた」「なんでみんなやめたの？」「さあ？」「ラグビー，（スコアは）何対何やったん？」「…。2対2くらい」すると，ここで一緒にラグビーをしていたよしひろくんが「違うで，5対0や」と，怒って口を出した。私はやすおくんが，試合が均衡しているような言葉を発した事で，ずるいことをした自覚があるのだろうなと感じていた。バツの悪そうなやすおくんに「言ってる事が違うけど，どういう事？」と問いかけた。やすおくんが無言で泣き出したので，静かに話せる職員室に場所を変えることにした。他の子にやすおくんが叱られているという印象を与えたくなかったからだ。一対一でやすおくんの思いを聞き，私の思いを伝えることにした。



思いを巡らせてほしいポイント

- やすおくんは，どうしたかったのでしょうか。
- あなたなら，やすおくんの姿をどう捉え，どのように関わりますか。

B ラグビーのチーム分け

エピソード 2

私はやすおくんが先ほど「2対2くらい」とごまかしていたことから、自分が何を言われるか理解している確信があったので「なんでみんなラグビーから離れていったかわかる？」と話を切り出した。黙っていたので「なんでやすおくんのチームばかり上手い人がいんの？」と尋ねると、もう一度泣き始めた。私は彼が泣いているのは“ずるいことを自覚している故の言いにくさ”と“核心に触れたバツの悪さ”と捉え、話を進めることにした。「ラグビーみたいな皆で遊ぶやつは、自分だけ楽しければいいの？前にたかしくんがチーム分けしたときは、皆やめへんかったね。何が違うかわかる？」という問いには「うん」と、言葉が返ってきた。たかしくんはやすおくと仲の良い友だちで、ラグビーが上手く、友だちにも優しく皆から一目置かれている存在だった。たかしくんは、うまくチームを分けており、それはやすおくんもよくわかっていた。「スポーツは、勝ったり負けたりするから面白いねん。チーム分けは、皆が楽しめるように考えなあかんと思うわ」と、私は言葉にして伝え、やすおくんははっきりと首を縦に振ってくれた。最後に、私は「皆が楽しくできるにはどうすればいいか考えてほしいな」と伝えた。「もう1回ラグビーする？」と優しく誘いかけると、やすおくんは泣きながらもしっかりと頷いたのでもう一度友だちを誘い、ラグビーを再開した。

思いを巡らせてほしいポイント



- 『私の思い』を伝えるには、他にどのような方法が考えられるでしょうか。
- あなたなら、やすおくんの思いや行動をどう捉えますか。



元になるエピソードが P.49 にあります。

A 僕を見て！何でも一番ですごいんだ！！

背景 1

たつやくんは、小学校1年生の男児。父、母、妹、たつやくんの4人家族。勉強も運動もでき、クラスの子どもたちからは一目置かれている。一方、自分ができることをひけらかし、偉そうにしたりすることによるトラブルが多く気になっていた。母親に相談しても「うちの子がまさか」と信じてもらえなかった。ある日、たつやくんが友だちのためにコマを折り紙で作ってきた。私（担任）は「すごい！優しいね。でもみんなにあげる分がないから、どうするか後で考えようね」と言ったものの、返事をするのを忘れていた。その日、たつやくんは家に帰って「先生があかんって言った」と話したのか、次の日、母親が「先生は、子どもの芽をつぶすのですか！」と言いに来られた。

エピソード 1

私は、友だちとのトラブルの中で「アホ」「バカ」という言葉をよく使うことが気にかかり「アホとかバカという言葉はどこで聞いたの？」と聞くと「ママに言われている」「言われてどちらかという、いい気持ち？嫌な気持ち？」「嫌な気持ち」「お友だちも嫌な気持ちになっているよ」「うん」と頷いた。「アホ・バカって言わないようにママに言おうか？」と聞くと「言ってほしい」と答えた。友だちにアホとかバカとか言わないことをたつやくんと約束して、たつやくんの思いを母親に伝えた。

思いを巡らせてほしいポイント



- たつやくんが、友だちに偉そうに言ったり、できることをひけらかしたりするのは、どんな気持ちが隠されているでしょうか。
- たつやくんと母親との関係はどうだったのでしょうか。たつやくんは母親との関係をどうしたかったのでしょうか。
- たつやくんが、アホ・バカとお母さんに言われて嫌な気持ちになっていることを私から聞いた母親は、どんな反応をしたのでしょうか。

B 僕を見て！何でも一番ですごいんだ！！

背景 2

たつやくんは、女の子とダンスをすることに抵抗があり、運動会のダンス練習には後ろ向きだったが、他の男の子が参加していくうちに練習するようになった。何でも1人でできるとなしていたのだが、友だちと協力することが増え、放課後に男女仲良く遊んだりするようになった。私は母親に『褒め電話（電話で子どもの良いところを伝えようと校内で取組んでいた）』でたつやくんの様子を伝えたり、時には放課後の遊びの様子を母親と一緒に微笑ましく見たりしていた。

エピソード 2

3学期が始まり、冬休みの出来事を話すとき、たつやくんは「沖縄に行って1泊して、そこからハワイに行って4泊した」とスピーチして、みんなから「すごい！」と驚かされていた。しかし、母親との話で全くの思いつきだとわかった。母親は「なぜ、そのようなうそをついたのか、一度家で話してみます」と帰られた。たつやくんは「みんなにすごいって言ってほしかった」と気持ちを伝え、母親は「うそをついたらうそをつき続けないとあかん。ハワイで何をしたのか、何を食べたのかを聞かれたときにまたうそをついて、どんどん困っていくからうそをついたらあかん」と思いを伝えられるなど、しっかりと話すことができたとのことだった。私は、たつやくんの得意なことや素敵なおとこで「すごい」と言われるように、学校で活躍できる場をもっと増やしたいと思った。そして、もっともっと認めたり励ましたりする声かけをしようと思った。

思いを巡らせてほしいポイント



- 以前の母親なら、私やたつやくんにどのように言ったでしょうか。
- 以前の母親とどのように変わっているでしょうか。
- 母親は、どうして変わったのでしょうか。



元になるエピソードが P.52 にあります。

A ビー玉ぬすんじゃいました

背景 1

4年生のかいくん。家族は父と母，兄（中1）の4人家族。両親は共働きで忙しく，かいくんが学校から帰ると近所に住む祖母が面倒をみてくれていた。かいくんは，体育の新しい遊びなど初めてすることは，失敗するかもしれないという恐れから，最初から「やらへん」と逃げてしまうことが多かった。また，自分の思いを上手に言葉にすることも苦手で，言葉が足りず友だちとケンカになってしまったり，思いをうまく伝えられずに嫌な言葉で友だちを攻撃してしまったりすることも多くあった。

エピソード 1

1学期，友だちとのトラブルが多く，かいくんが友だちに手を出してしまったり，言葉で攻撃してしまったりすることが何度も続いていた。授業中の態度も悪く，床に寝転んだり机に突っ伏して話を聞かなかったりすることも多かった。クラスメートのまさやくんとはそりが合わないこともあり，口喧嘩をよくしていた。その都度，個別にどんな思いでしてしまったのか，どうしたらよかったかなどを話してきた。しかし，私（担任）が一方的に話をし，かいくんはうつむいたまま何も話さないということが多かった。私は話をするときには必ず，かいくんのことを大事に思っているということを伝えながら，あかんことはあかん伝えるようにしていた。私は，友だちになかなか謝れないでいるかいくんのことを“自分が悪かったことはわかっているように思うのだが，これからどう関わっていけばいいだろう”と悩んでいた。



思いを巡らせてほしいポイント

- このとき，かいくんはどのような思いを持っていたのでしょうか。
- あなたならどう関わりますか。

B ビー玉ぬすんじゃいました

背景 2

2学期が始まってすぐ、宿泊学習があった。かいくんは、火おこしとレクリエーションの係をすると立候補した。“自分の役の仕事を最後まで務められるかな”と不安なところもあったが“一つのことをやり遂げることで、自信がついたらいいな”と願い“見守りながらそっとサポートしていこう”と思った。わからなくて困ったということのないようにスモールステップで教えたり、班のみんなと協力できるように支援したりしたことで、自分の係を最後までやり遂げることができた。今まで途中で投げ出してしまったり、苦手なことやできるかわからないことから逃げてしまったりすることの多かったかいくんが、最後まで自分の係の仕事をやり遂げられたことは彼にとって大きな成長だと思う。私はとても嬉しかった。

エピソード 2

ある日、教室の教師机に1枚のノートの端切れが入っていた。開いてみると「ごめんなさい ビー玉ぬすんじゃいました。返します。かい」と書かれていた。私の知らないうちに机の中からビー玉をとって遊んでいたようだ。物をとることは決して良いことではないが、とったことを認め、素直に謝ってきたことがとてもかわいらしく見え、少しずつ心を開いてきてくれていることが嬉しかった。その後、下校時に声をかけ「とったことはあかんかったけど、ごめんねって言ってくれて、本当のことを伝えてくれて嬉しかったよ」と話した。

思いを巡らせてほしいポイント



- かいくんは、どのような思いで手紙を書いたでしょう。
- 話した後、かいくんはどのような行動をとったでしょう。また、どんな気持ちだったでしょう。
- かいくんにとって私は、どのような存在だったのでしょうか。何がかいくんの成長を支えたのでしょうか。



元になるエピソードが P.55 にあります。



検討会で **ポイント** となる視点

エピソード検討会をするとき、子どもを見る視点やそのときの行動を様々に読み取ることは、子どもを理解するうえで重要です。研究プロジェクトで検討を重ね、そのエピソードのポイントとなる視点を記述者がまとめました。

エピソード検討会をするうえでの、参考にしてください。

<ポイント> ミニエピソード ①

あおいちゃんは、身の回りのことはできる。でも、うまくコミュニケーションができず、思いはあってもどうしていいかわからない。あおいちゃんに友だちと関わりを持つことの楽しさを知ってほしいと思った。そのためには保育者としてできることは何か考えたい。

<ポイント> ミニエピソード ②

以前は思い通りにならないと激しく怒っていたが、園での毎日の遊びや生活の中での積み重ねと、友だちとの関係から、しょうくんの安心できる居場所ができてきたのだと思う。そこをベースに、思い通りではないハプニングも「時間を戻さなくても」「なんとかなる」と受け止め、友だちともしくは1人でも「これから」をつくることができると考えられるようになったと感じた。心の育ちにはこのような長いドラマを保障できるような緩やかな時間や環境が大切だと考えた。

<ポイント> ミニエピソード ③

たかしくんの生きづらさは、人が生きていく上での大切な欲求である『食べる』ということだった。私たちは保育者としてどの子にも好き嫌いをせず何でも食べてほしいと願う気持ちがあるが、まずはたかしくんの気持ちになって、食べたくない思いをしっかりと受け止めそのつらさに寄り添い、思いを受け止めたときたかしくんの思いが見えてきた。子どもが成長していく道筋は、それぞれで違うのだと実感した。

<ポイント> ミニエピソード ④

さとしくんは普段からあまり注目されることが好きではなかった。友だちの様子を見ているさとしくんを、ただ見ているだけで遊びには入れてないと捉えていたが、自分も遊びに入っている気持ちで見ていたときもたくさんあったのかもしれないと思った。このとき“一緒にやってみたい”“遊びたい”という気持ちがさとしくん自身を動かし、遊びに入れたこと、そして友だちと一緒に遊べたことがとても嬉しく思えた。

<ポイント> ミニエピソード ⑤

できるかできないかにこだわっていたはなこちゃん。しかし、話し合う中で、そのこだわりはなんとか泳げるようにしてあげたいと願う保護者や保育者のこだわり（プレッシャー）でもあったのかという問いが生まれた。他者と比べるのではなく、自分なりの『できた』に出会えたこと、水遊びそのものの楽しさに気付けたことは、はなこちゃんの大きな心の育ちだったと言えるのではないか。

<ポイント> ミニエピソード ⑥

プライドが高く、普段から特に苦手なことを避けたり、素直に自分の思いを出しにくいたいちくんが、初めて私（担任）を素直に頼ったり、自分の頑張りを自分で認められたことに、私自身とても心を動かされた。たいちくんの心の変化はどこからくるもののだろうか、たいちくんのような一見自分を強く見せようとするけれど本当は自信がない子どもに、どのような関わりが大事なのだろうか。

<ポイント> ミニエピソード ⑦

友だちの跳び箱の邪魔をするかずきくんの心の底にある本当の思いはどんなものだろう。その思いを受け止め、どうアプローチしていけばよいのか。やりたいけれど素直に伝えられない姿の中には、ありのままの自分では受け止められないと感じているかずきくんがいるのではないか。かずきくんの気持ちにどう寄り添い、保育を進めていくのか考えていきたい。

<ポイント> ミニエピソード ⑧

すべての子どもに等しく愛情を持って接することができればよいが、苦手意識を持って、うまく関係のつくれないうちもいる。その感情をどう捉え、その子にとっての関わりをより良いものにするためには、どのようなことが必要なのだろう。専門職として子どもの心の育ちを願い育むために、自身の心に1歩踏み込んで問いかけてほしい。

<ポイント> ミニエピソード ⑨

集団生活の中で子どもは、それぞれの思いを持ちながら、ときには自分の思いを通したり、ときには我慢しながら過ごしている。1人だけの思いが通るのではなく、みんなが楽しく過ごせることが理想であるが、なかなかうまくはいかない。

まずは自分の思いを出し、受け止めてもらうことが基本であり、いつかは相手の思いに気づき、相手の事も考えられるようになってほしい。そのためには、その子の心の育ちを見極め、タイミングを計る必要がある。子ども自身に気付いてほしい、子ども同士で解決してほしい気持ちは勿論あるが、保育者として伝えたい思いを伝えることが、子どもの心に響くときもあるかもしれない。

<ポイント> ミニエピソード ⑩

子どもが友だちに偉そうに言ったり、強がって自分自身を強く見せたり、うそをついたりするのはなぜか。必ず「そうさせてしまう」背景があるはずだ。事象を正すのではなく、背景を知って寄り添うことが子どもの幸せにつながるのではないだろうか。また、保護者の考え方をどのように理解すれば、保護者と担任の関係は、より良くなっていくのか。子どもを真ん中に置いた話し合いや連携が大切だと思う。

<ポイント> ミニエピソード ⑪

思春期に差しかかる小学校4年生という時期に、自分の思いを素直に出せず反抗的な態度を取ってしまう心の葛藤を考えてほしい。一朝一夕で結果は出ないが、年齢が大きくなって子どもを認めたり、大事に思っていることを伝えたりすることで、心が満たされ安心して活動ができることにつながるのだと思う。



子どもへの理解を深めよう エピソード集

ねらい

子どもへの理解を深めよう…エピソード集は、ミニエピソードに詳しい背景や考察を加えたものとなっています。エピソードを記述したときの考察を【考察1】とし、その後研究プロジェクトの検討会により、子ども理解が変容したり、子どもの心の育ちをより深く読み取ったりした考察を【考察2】として加えたものもあります。考察を読むだけでも深い学びがあるでしょう。

エピソードを検討する中で、子どもの心の育ちに目を向け、一人一人の子どもの思いを受け止め、肯定的な視点で子どもを理解する姿勢が醸成されていけばと願っています。

また、メンバーによるエピソード検討会の様子を、DVDで撮影し、貸し出しています。フラットな関係でお互いの意見を交わし、子ども理解を深めていくエピソード検討会の雰囲気を感じていただけたらと思います。

一緒にしよう

<背景>

あおいちゃんは、3歳児で入園した。父親の仕事の都合で入園式の前日に引っ越し、翌日から登園した。入園してからずっと母親から離れることができず、母親もその様子を見て困っていると同時に、あおいちゃんを園に預けることに不安を持っているように感じていた。そこで、母親に昨夜のことや健康状態など話してもらう時間をとるなど、個別に配慮することで、あおいちゃんが泣いていても母親から預かれるようになった。これまで、母親と家の中で過ごすことが多かったことを聞き、あおいちゃんの集団での経験を増やしていきたいと思った。

保育室では、あおいちゃんより先に登園してきた子どもたちが思い思いに遊んでいる。その様子を見ただけで泣きながら私（担任）の服をぐっとつかみ、一日中その状態で過ごす。昼食時も私から離れることなく、私が保育室から出るときは、代わりに保育者の服を離さないということも続いた。体調をくずしての欠席が多く、夏までこのような状態のままだった。

<エピソード 1>

9月のある日、他の子どもがビーズのひも通しをしているのに興味を示したあおいちゃんだが、近づくことができない。私が「あおいちゃん、ビーズしたい？」と聞くと、あおいちゃんは「したい」と答えたが、笑顔はなく足は動かない。最近では短い言葉で思いを伝えられるようになってきた。私がそばにいれば泣くことは減り、服をつかんだまま友だちが遊んでいる様子を見ることも増えた。私は“うまく他の子どもの遊びの中に入ることができれば”と思っていたので「先生と一緒にしようか」と手を出して誘うとあおいちゃんは「うん」と答えて歩きだした。あおいちゃんにとっては、子どもの輪に入るのもビーズ通しも初めてだった。私はあおいちゃんの隣に座り「こうするんだよ」と1つビーズを通し渡した。あおいちゃんは、ビーズを1つ手に取ってひもに通すと顔を上げて、はにかんだように微笑んだ。その後は他の子どもがしているのを見ながら、嬉しそうにいろいろなビーズを通していった。

その後は、初めての遊びには不安で泣くこともあったが、遊びや行動の見通しが持てるように言葉で伝えるようにすると、泣くことが減った。保育者と一緒に遊ぶ経験を重ね徐々に楽しむことが増えてきた。しかし、異年齢児と関わる場面では、不安から泣くことが多かった。母親には、あおいちゃんが初めてできるようになったことや頑張ったことなどを安心できるように伝え、「家でもお話をきいてあげてくださいね」と話をした。

4歳児になると、部屋の中では私から離れても友だちと遊べるようになったが、園庭では私のそばにすることが多く、砂場やブランコに行くときは「一緒にしよう」と私の手を引くあおいちゃんだった。

そんなある日のこと、あおいちゃんはクラスの友だちと園庭に出てきたが、私がいなことに気づきその場に止まってしまった。私が遅れて出ていくと、走ってきて黙って手をつなぎにきた。私は、あおいちゃんがこわばった表情をしていたので不安だったんだろうなと思った。そして、いつものように「(ブランコを)一緒にしよう」と言ってくるかなと思いながら、ブランコの方に向かいながら手をつないで歩いていった。

<エピソード 2>

年下の子どもが、平均台の上ってみたものの慣れない様子で1歩、2歩とふらつきこわごわ進んでいた。私はあおいちゃんの手をつないで平均台へと向かった。平均台のそばに来るとそっとあおいちゃんの手を放し、年下の子どもに手を差し出した。その子は私の手を持つことで、ゆっくりと渡りきることができた。私は手をたたきながら、その子とあおいちゃんに「やった。すごいね」と声をかけた。渡りきった子どもは緊張した顔から笑顔となった。じっと見ていたあおいちゃんの顔もパッと明るくなった。他の子どもが『頑張ってきたこと』と一緒に喜んでくれているあおいちゃんが愛おしくなった。

平均台のスタートのところに、他の子どもたちが待っていた。私は“今ならあおいちゃんが他の子どもに関われるかもしれない”と思い「あおいちゃん、先生みたいに、小さい友だちのお手伝いしてくれるかな」と話しかけた。あおいちゃんはどうも、待っている子どもたちのところに走っていき手を差し出した。平均台を歩く子からも、手をつなぐあおいちゃんからも一生懸命が伝わってきた。平均台を渡りきるまでの少しの間がとても長い時間に思えた。あおいちゃんが自分から友だちに関わりを持ってたことが嬉しかった。「『やったー、すごいね』って一緒に喜んだらいいんだよ」と伝えると「うん」と力強く返事をして笑顔を見せた。その場にいるみんなの手をたたく喜び合った。

<考察1>

あおいちゃんは入園当初から不安いっぱいでも過ごしてきたと思う。どうしたら友だちの中で自分を表現し、楽しく過ごすことができるのか、と考えてきた。身の周りのことは自分でできるが、語彙も少なく、場面に応じた言葉がうまく使えずコミュニケーションが取れない。でも、あおいちゃんは話さなくてもたくさんの思いを持っている。その思いを受け止め、ずっとそばで寄り添うことで、あおいちゃんの安心につながり1歩踏み出せたと思う。あおいちゃんとの関わりを通して『寄り添う』ということを考えさせられた。自分を出せることが、あおいちゃんの大きな自信につながってくれたらと願う。

いつもいつもあおいちゃんだけに関われるわけではないし、どこまで関わる必要があるか、成功体験だけでなく、失敗体験も通して成長することもある、と考えると心の育ちに寄り添うことはとても難しい事だと感じている。

<考察2>

あおいちゃんの不安な姿を考えると、母親の存在は大きい。知らない土地での初めての集団生活は、あおいちゃんだけでなく母親にも大きな不安を抱かせただろう。母親も安心できるように、日々の様子を伝えたり思いを聞いたりするなど関わりを持ちながら、一方であおいちゃんには安心できる人間関係の下で楽しい活動が経験できるようにしてきた。母親が安心できればあおいちゃんも安心できるだろうし、あおいちゃんが楽しいと思えば母親も楽しくなる、そんな希望を持ち、母子と関わってきた。

子どもの育ちを考えると、保護者の存在は切り離せないものだが、プラス材料にならない保護者の状況もある。なかなか信頼関係が築きにくい保護者もいるが、園の中でチームとして支え合いながら、子どものために働きかけを続けていきたい。

再びの引っ越しで転園されたあおいちゃん家族だが、新たな場所で母親もあおいちゃんも楽しく過ごしていると電話があった。職員の中で「よかった」があふれた。私たちの関わりは短い期間だったが、これからの親子にとって孤独ではなく支える存在がいると思ってもらえると嬉しい。

蓄積されてきた心の育ちと嬉しいハプニング

<背景1>

しょうくん（3歳児，男児）は父母，兄2人の5人家族。それまでは短期間，他園のプレスクールに行っていたが，集団生活に馴染みづらいついと言われ本園への転園を決めた。入園当初は母親と別れづらく，泣いてバイバイすることが多くあり，その状態が秋頃まで続いた。母親は入園当初「集団生活ができない」「友だちができない」とずっと心配されていた。3歳児の運動会や発表会などの行事は当日の様子を心配して欠席させていた。

入園当初しょうくんは登園後も常にリュックを背負い，「帰る」とよく保育室から出て行こうとしていた。友だちと関わろうとする姿はあまり見られなかった。高いところが好きでアンバランスな刺激を楽しむような姿もあった。また，人とのやりとりはまだ苦手で，思いが通らないとすぐにどこかへ行っていた。給食も苦手なものが多く，ほとんどのものを「食べない」と拒否，白ご飯を少しだけ食べていた。人と一緒に食べることが嫌で初めの頃は机の下にもぐって食べていた。少しずつ私（担任）の膝の上に座れるようになり，5月ごろには1人で座って食べるようになったが，人と対面に座ることができず，壁に向かって1人で食べる状態が1年以上続いた。昼寝も苦手で，寝転ぶことも嫌で私は根気強く付き合っていた。

<エピソード 1 みんなと相撲ごっこ>

6月，クラス全員（14名）でホールに行き『とんとんとん何の音』をして遊んでいた。しょうくんはホールの隅のろく木の上にはいたが，みんなが遊んでいる様子に聞き耳を立てて，楽しそうな声や子どもたちが追いかけているのを魅力に感じて段々と近づいてきた。そこで私が「何の音？」と問いかけると，しょうくんは「うんち！」と答えた。するとみんなが大笑いした。しょうくんはその反応が嬉しく，そこから追いかけてこにも参加した。しかし，友だちと上手く関われず叩いてしまったり，ぶつかったりしてしまう。そこで私はぶつかり合いから『相撲ごっこ』に展開してみようと考えた。相撲の体当たりがしょうくんの刺激にもマッチして，この日は30分近くクラスのみみんなと遊んだ。このとき相撲ごっこをしてよく遊んだのがひろとくんだった。

3歳児クラスでは，私との信頼関係を基盤に少しずつ友だちとの関係を積み重ねていった。特にひろとくんは，描いた絵をプレゼントしたり，ひろとくんとなら手をつないで歩けたりするなど特別な存在になっていた。

しょうくんは4歳児クラスに進級。3歳児のときから，しょうくんの居場所となっている段ボールの囲いを拠点に活動が広がっていった。しかし，鬼ごっこで心構えができておらず思ってもいない瞬間にタッチされたときや，午睡から1番に起きたかったのに他の友だちの方が早く起きたときなど，自分の思い描いていたイメージと違ったときには受け止めきれずに「時間を戻せ～！！」と激しく泣いてなかなか立ち直れないことも少なかつた。私は，そんなしょうくんに実際に時計の針を戻したり，じっくり話を聞いたりして，受け止めて対応してきた。



<エピソード 2 元に戻せ！>

友だち関係が広がってきて、部屋の隅にあるしょうくんの段ボールの囲いスペースに入りたがる子どもも増えてきた。最初はひろとくと2人でそこでカード遊びをしていたが、楽しそうに遊ぶ2人を見て、他の子どもたちも、入れて欲しくてやってくる。“入れてあげようか”と悩むしょうくんだったが、そうこうしている間に数人が入ってきて囲いがつぶれてしまった。しょうくんはそれを見て大泣きして「みんなのせいであつれた！元に戻せ！も～」と激しく怒っていた。

このときは大泣きして激しく怒っていたしょうくんだったが、このような関わりを日々重ねながら、少しずつ友だちとの関係が広がり、集団の中にしょうくんの居場所ができてきているように感じた。

<エピソード 3 嬉しいハプニング>

4歳児クラスになっても給食は壁に向かって1人で食べる状態が続いていたが、嬉しいハプニングがあり大きな変化が起こった。

9月にしょうくんのクラスに入った保育実習生が、給食時にしょうくんがいつも座っている特等席に気付かないで座っていた。少し遅れて食堂にやってきたしょうくんは、いつもの自分の席に実習生が座っていて一瞬困った顔をしていたが、すぐに周りを見渡してひろとくんを見つけた。そしてひろとくんの隣の席が空いているのを確認して、すぐにそこに行って座り給食を食べ始めた。私は奇跡的な瞬間だと思った。

その日からしょうくんは、いつもひろとくんの隣の席に座り、他の友だちとも机を囲んで給食を食べられるようになった。ちょっとしたハプニングから、それを受け入れ新しい形をつくったしょうくんの姿に大きな成長を感じた。

<考察>

入園当初はなかなか周りとの関係を作りづらい時期が続いた。そんなしょうくんを“焦らずゆっくり慣れていけばいい”と思い保育してきた中で、私との信頼関係ができ、園生活での安心の基盤となった。徐々に遊びや好きなものを仲介に特定の友だちができて、次はその友だちを仲介に集団の中で新たな友だちや居場所ができてきた。しょうくんの困った行動や言葉を注意するのではなく、友だちとの関わりのきっかけと捉え遊びを展開するなどして働きかけてきた。それらの一つ一つが心の育ちとして、少しずつしょうくんの中に積み重なっていったのだろう。実習生が間違っしょうくんの席に座ってしまうようなハプニングにも、しょうくんの中に蓄積されてきた心の育ちが何かのフックになり、その偶然をひっかけてキャッチすることができたのだと思う。

友だちと共に時間を過ごす場所だからこそ、そういう心の育ちが少しずつ蓄積されたと感じる。そのような長いドラマを保障できる緩やかな時間の流れと環境、そしてタイミングが子どもにとって大切だと考える。3歳児クラスの頃は先が見えずに正直どう支えていくべきか悩むことが多かったが、子どもの力、集団の力を信じ、環境を整え、見守ることの大切さを改めて教えてくれた。

わがままじゃない

<背景>

たかしくんは2歳5カ月で入園し、現在5歳6カ月の男児である。自園では、3～5歳児は異年齢保育をしている。3歳のときに父母が離婚し今は母親と弟（1歳児）、祖母と一緒に暮らしている。母親は飲食店で働き、祖母が保育園の迎えや母親の日曜出勤時に子どもを預かっておられる。

乳児期、たかしくんは一人遊びが多かった。言葉を話すのが少し遅くジャスチャーや表情で思いを表現していた。現在は5歳児となり、思いを言葉で伝えることも増え、積み木に動物フィギュアや人形を加えて特定の友だちとなら同じイメージで遊ぶこともある。基本的には一人遊びが好きで、ゆったりと図鑑を見て遊ぶことや保育者と遊ぶことが好きな子どもである。

私（園長）は、昨春たかしくんが4歳児になったばかりの頃に出会った。たかしくんのクラスからは、大勢の子どもたちの元気な声が事務所にいる私にも聞こえていたが、たかしくんの声を聞くことがなかった。いつ見ても、部屋では静かに1人で遊んでいるか、友だちの様子を眺めていた。私は“どんな声をしているのだろう”と思っていた。また、たかしくんは乳児の頃から、偏食がきつく食べられるものが決まっていた。白ご飯はなんとか食べられるが、おかずは保育者が何度も促してやっと数口食べる程度であった。

幼児部の会議で、たかしくんが給食を促されて渋々食べていることや、食べることが苦痛そうに見え、どうすればたかしくんは楽しい食事ができるのかという悩みが担任から出された。以前からたかしくんだけに『お味見』という食の取り組みをしていた。担任から一口ずつ口に運んでもらってその日の給食を味見し、どれだけ食べるかをたかしくん自身が決めていた。例えば、同じみそ汁でも中に入れる具材によって味が異なり、日によって具の煮え具合で噛み応えが違ったり、ご飯の炊き加減などでも食感が違ったりする。担任は、たかしくんは食感がとても敏感であることに気づき、量を減らす前に、見た目だけでなく『お味見』をして食材の味や食感を確認できるようにしていた。毎回の給食の量をたかしくんと一緒に決めていたが、結局は毎回残して終わっていた。

話し合いでは、たかしくんが給食を目の前にして、「どれを減らしてほしいか」と尋ねられる気持ちはどうだろう、本当は“どれも食べたくない”という思いだろうが、“先生が言うから食べなきゃ仕方ない”という思いかもしれない。食べられないのに、毎日、先生と向き合い（迫られ）、たかしくんも辛いだろうと皆が納得した。

そこで、たかしくんにとって給食が少しでも楽しくなるような関わりとして、自分で食べる量を決めて入れたらどうだろうかという提案があった。食べられないから減らすのではなく、自分はこれだけ食べられるよという思いで給食に向かえるようにしてみようということで、『お味見』に加えて新しい取組をすることが決まった。

<エピソード>

4歳児のとき、会議で話し合いたかしくんが自分で給食を入れるようにした。担任は、入れた量はほんの一口であっても、食べきったことを認めていくよう心がけた。たかしくんにとって以前と違うことは、「全部食べたよ」と言えることで、担任に空っぽになった食器を持ち上げ見せびらかし、その表情は少し得意げであった。

この取組が続いたある日、私は事務室で聞いたことがない声を聞いた。“今の楽しそうな声は誰なのだろう”と部屋に行ってみると、たかしくんが廊下で「早く園庭に行こう」と先生を誘っている声だった。私は“こんな声をしているのか”と改めて知り、今から遊ぶぞと意欲満々で走っていく背中をみて心が温かくなった。

<考察1>

たかしくんの声がクラスの中で聞けるようになったことと、この給食の取組は重なりあっていると思う。たかしくんにとって、『食べる』というどうしてもできないことを理解してもらえたことはとても大きかったのではないだろうか。食べられないから減らしてあげるというスタンスではなく、全職員がたかしくんの気持ちを受け止め、たかしくん自身が自分で決められるような取組にしたことに意味があった。たかしくんが自分で決めることを尊重し、食べられないという思いにみんなで寄り添い、そっと背中を押すような取組になっていたのではないかと、それがたかしくんの変化につながったと考える。

また、そのような保育者の働きかけを見て、クラス子どもたちは、たかしくんと一緒に見守り、年長児は「おいしいよ」と励まして誘ったり、小さい子どもも「今日は〇〇食べはった！」と一緒に喜んで報告してくれたりした。こういった子ども同士の関係性も温かく、他の子どもたちにも保育者の願いが伝わっていると感じとても嬉しかった。

この取組をきっかけに、たかしくんの笑顔が増えたように思う。毎日安心してグループの中で自分を出しながら生活していた。自分をわかってくれる大人や友だちがいるということが安心感につながり、たかしくんのグループの仲間への関心へと広がったと思う。

現在、たかしくんは、食材や食感によって好き嫌いはあるが、食べる量はどんどん増えてきた。遊びが充実し空腹になって、テーブルの友だちとふざけて楽しそうに食事の時間を過ごしている。先日、人形で遊んでいるところに出くわした。そこには畑があり野菜が植えられているという設定だった。食べ物のことを話しながら遊んでいるたかしくんを見てとても嬉しかった。偏食はわがままと捉えられがちだが、“苦手だ”“食べられない”という子どもの思いをわかってもらうことや子どもの“食べられるようになりたい”という気持ちに寄り添い、一緒に歩いていけるような保育者と子どもとの関係が大切だと心から実感した。

<考察2>

研究プロジェクトに参加し検討会で、小学校の先生から「1年生が春には給食メニューが心配で登校を嫌がることもある」との話があった。好みを言葉で伝えることができるような年齢であっても、「好きだからたくさん食べたい」、「嫌いだから食べたくない」と伝えるには、大人との信頼関係がなければならないのだろうと思った。子どもが伝えた思いをしっかり受け止め、信頼関係を築くことが何よりも大切だと思う。食べるということだけでなく、生理的な欲求に対しては特に、0歳児であってもその思いが尊重できるようにすることが大切である。改めて、就学前施設、小学校も共に、まずは子どもの思いを受け止め安心できる場所となるよう、子どもとの心のつながりを築き、自分自身が安心基地となるよう努力することからスタートだと思った。



一緒にやってみたいなあ

<背景>

5歳児男児のさとしくんは、父・母・兄の4人家族。3月生まれで恥ずかしがりやという印象があり、人前で自分の思いを言葉や行動でうまく表現しにくいように感じていた。

3歳児のときの担任が再び担任になり、声をかけられるといつもとても嬉しそうな表情を見せていた。その日の活動に参加するときも、担任から声がかかるのを待っていることが多かった。担任がさとしくんの気持ちより他の子どもを優先するような言葉をかけると叩いたり、噛んだりする姿が見られた。私（主任）は傍で見守りながら「今は、まだここで良かったんやね」と気持ちを言葉にして伝えたり、「この後、ご飯食べれるように机並べ替えるんだって、だから場所をあけて欲しかったんだって」「みんな、ご飯の用意しているわ」と状況をわかりやすく説明したりして、様子を見守る日もあった。

数日前、園庭でみんなの様子を見ていたさとしくんに「追いかっこしよう」と誘ってみた。すると勢いよく走り出し、笑いながら私を追いかけてくるということがあった。

<エピソード>

園庭で遊ぶ友だちを1人で見ているさとしくんを見つけた。「何して遊ぶ？」と声をかけると、笑顔を返してくれた。「追いかっこする？」と聞くと首を横に振る。「じゃあ、どこまでケンケンで進めるかやってみない？」と誘うと、傍で聞いていたまいちゃんが「やるやる！」とケンケンをして見せた。私も一緒にケンケンをしたが、さとしくんは動かなかった。フープを並べてケンケンしてみようと『ケンケンパ』ができるようフープを置いておくと、りょうこちゃんが「入れて」とやってきた。りょうこちゃんは、楽しそうにフープ遊びを続けた。さとしくんはその様子をずっと座って見ていた。私はフープを1列に並べ直し、りょうこちゃんと私が両端から歩いてきて、出会ったところでジャンケンをして、負けたらスタートに戻るという遊びに変えてみた。私は“さとしくん、興味を持ってくれるかなあ”と思いながら遊んでいた。りょうこちゃんと2人で「勝った！」「急がな負けちゃう」と言いながら遊んでいるのをさとしくんはずっと微笑んで見ていた。“気になっているのかな？”と思いながら遊びを続け、時々「さとしくんも入って～。先生1人やったら負けちゃう」と声をかけた。りょうこちゃんも「さとしくん、こっち並んで待ってて」と誘ったりしていた。しばらくして、ふと振り返るとさとしくんがすぐ後ろのフープの中に立っていた。驚いたと同時にさとしくんが遊びに入ってきてくれたことがとても嬉しかった。でも“たくさん言葉をかけて遊びの雰囲気を変えると、離れていってしまうかもしれない”“さとしくんが遊びたい気持ちを行動に変えたことを大事にしたい”と思い、すぐにりょうこちゃんとジャンケンができるように「さとしくん、助かる～お願い」とだけ声をかけた。さとしくんはずっと手を出しジャンケンをした。“いつも当番係のジャンケンをするときは、手を出すのもためらうことがあるのに”と少し驚いた。そして“一緒に遊べるかも”と感じた。さとしくんは「次はこっちに入って～」とりょうこちゃんに言われ、ジャンケンに負けて悔しがらなく反対側のフープに並びに行き、私ともジャンケンをした。その様子を見ていた子どもたちが「よせて」と次々に入ってきた。私は“人数が増えたら、さとしくんはどうするだろう？す～っと離れていってしまうのかなあ”と気になりながら見守っていた。でもさとしくんはその場から離れることなく、最後まで遊びを続けた。さとしくんは遊びに夢中で、急いで並んだり、ジャンケンに勝って嬉しそうに笑ったりしていた。

片付けの時間になり、みんなと保育室に戻って行くさとしくんは、少し和らいだ表情だった。私は“みんなと遊んで楽しかったね”という気持ちと自分から遊びに入ってきたことが嬉しくて「さとしくん、ジャンケン強かったなあ。また一緒にやろうね」とだけ声をかけた。

<考察1>

日々のさとしくんを見ている中で“何か一緒にできることがあればいいな”という思いを持っていた。無理強いしないようにしながらも常に気にかけて誘いかけたことが、さとしくんの気持ちを少しずつ動かし“遊んでみたい”“やってみよう”という気持ちに変わっていったのかもしれない。さらに保育者と一対一ではなく、友だちとのやりとりが加わったことも、さとしくんの気持ちを動かし行動に変えたのかもしれない。さとしくんが楽しく遊ぶ姿を見ていると本当はもっとやりたいこと、遊びたいことがたくさんあるだろうと思える。今回さとしくんが周りを意識し過ぎず楽しく遊ぶ姿を見られたことで、どのような環境作りや関わり方が良いのかを考えていきたいと思った。

<考察2>

“なぜか、このときはうまくいった”という曖昧なことではなく、うまくいったときの『なぜか』の部分をエピソードを通じてきちんと言語化していくことが必要なのだろう。例えば今回、私自身も意識していなかったさとしくんへの誘い方や言葉かけ、さりげない関わりが、さとしくんの遊びたい気持ちを後押ししたのだと検討会の中で改めて感じた。一人一人の子どもの育ちに願いを持ち、どう寄り添い関わっていくかを考えることが、大切な保育の本質のように思う。

さとしくんは他児の遊びを見ているだけのことが多いが、よく見ると楽しそうに身を乗り出して見ていることがあった。ただ見ているだけでなく“一緒に遊んでいる”という気持ちになっていたのではないかと気付いた。保育者が、子どもの行動だけを見るのではなく、その奥に潜む心の動きをわかろうとすることが、その子を理解し心の育ちを支えることにつながっていく。

また、家庭と連携をとる中で、さとしくんは園と家庭とで見せる姿が違うことや母親と保育者で『できる』の捉え方が少し違っていることにも気付いた。母親はさとしくんのすること一つ一つに声をかけ、それをさとしくんがやったことを『できる』と捉えていたが、園ではクラス全体へ声をかけ理解することを『(1人で)できる』と捉えていた。家庭と違い、一つ一つ声をかけられない園生活で、さとしくんは不安な気持ちが大きかったのかもしれない。家庭と連携を取り、さとしくんが本当はどこまでできるのかを見極めたり、どう関わればよいかを探ったりしながら自分でできていることを実感できる環境作りや働きかけを考えていかなくてはならない。

さとしくんが、叩いたり噛んだりすることについても“思いを出している”“主導性がある”と捉えると見方が変わってくる。行為を注意するよりも、本児の思いを受け止め、どう表現すればよいかを根気よく伝え、もっと思いを出せるよう働きかけていけるだろう。

そして、子どもが『できない』のではなく『やらない』という選択も尊重できる園でありたい。どんな気持ちも受け止められることで、安心して園での生活が送れることにつながる。いずれはできるようになってほしいと思うことでも、まずは思いを伝えられる関係を作ることが基盤となると思う。



はなこちゃんの「できた！」

<背景>

はなこちゃんは、父、母、はなこちゃんの3人家族、昨年度3月に他の施設から転園してきた。

前の園は、全園児数が少なく、クラスの中で何でも1番にでき、はなこちゃん自身も常に自分が1番できるということを自覚していたようだった。しかし、転園してからは、自分よりも運動ができる子どもや自分が知らない事を知っている子どももたくさんいるという状況に戸惑いを見せていた。また、途中入園ということもあってか、できない自分を見せたくないという気持ちも持っているのではないかと私（担任）は感じていた。

一人っ子で教育熱心な両親のもとで育っているので、いろいろな事を知っている。また、わからないことがあると「なんで?」「どうして?」などすぐに大人に答え（正解）を求め「はなこちゃんはどう思うの?」と尋ねても「わからない」と言うことも多かった。私は“もう少し気楽に過ごせたらいいのになぁ…どうしていいのかなぁ…”と思っていた。

母親も父親もはなこちゃんへの言いかけができず“今は単なるわがままではないかな?”と思うような場面でも、結局ははなこちゃんの言いなりになっている場合がよく見られた。

進級した5歳児の春は、遊びの場面で自分がやったことがない事に出会うと、①じっと固まって見ていて誘っても首を振る。②「はなこちゃんはできひん（やらへん）」とあらかじめ言う。③他の友だちを誘って違う遊びをしようとする。④保護者が見ている場面ならば母親に泣きつくなど、できるか、できないかにこだわり、人に格好悪い所を見せたくないというプライドのようなものを強く感じた。私にも心を開ききらないはなこちゃんを感じていて、どのように距離を縮めていけばよいか迷っていた。

<エピソード 1>

6月中旬、プール遊びが始まると、はなこちゃんは他の子どもたちが泳いだり潜ったりしている様子に、びっくりしているようで、プールの端で固まっていた。また、顔に水がかかることが苦手らしく、子どもたちがあげる水しぶきを迷惑そうな顔でよけていた。他の子どもは、2年目のプール遊びという事もあり、どんどんチャレンジする気持ちが生まれ、泳げるようになったり、顔をつけられるようになったりと、大胆にプール遊びを楽しむようになった。そんな姿を見ながら、日に日に表情が曇っていくはなこちゃん。同じように顔がつけられなかった友だちのあいちゃんと遊んではいたが、表情は晴れなかった。そのあいちゃんがいつの間にか顔をつけられるようになり「先生見てて！顔つけられるようになった！初めてできた！」と大興奮している。はなこちゃんは全く笑わず硬い表情で身動きすらしなくなった。私も何とかしてあげたいと思うものの、何を言っても口を真一文字に結んでいるはなこちゃんの姿にどう援助したらいいのかわからなかった。ブクブクと水の中で泡を出すところを見せたり「目を開けなくてもいいんだよ」「息を止めてみてもいいよ」など色々声をかけてみたりした。はなこちゃんもやってみようとはするのだが、どうしても水面の直前で怖くなって顔が上がってしまうようだった。顔をつけたいと願う葛藤する姿を見せるはなこちゃんと、顔をつけたいと願うならそうさせてやりたいと真っ向からやり方を伝えようとする私。歯車がかみ合わず、どうにもならなかった。

水の苦手なしんじくんがビート板を使って浮力を感じる姿があった。顔はつけていないが「できた！泳げた！」と大興奮！そんなしんじくんの姿を見て私は“顔をつけられるかどうかではなくて、本人が水と戯れて遊び、浮力や流れを感じたりして楽しいと感じることが大事なのではないか。顔をつけることにこだわらなくてもいいのではないか”と気付かされた。明日は、はなこちゃんにビート板をすすめてみようと考えた。

<エピソード 2>

「はなこちゃん、ビート板使うとな、お顔つけなくても水にビューンって浮けるんだよ。しんじくんが昨日やってみてたんやで」と見本を見せてもらいながら「ほら！な？」と伝える。表情を変えず、黙ってビート板を受け取るのはなこちゃん。何かをさせようと思えば思うほど、はなこちゃんの心が遠ざかってしまうような気がして、一応ビート板の紹介はしたもののその後使うかどうかは本人に任せてみようと思い、それ以降は積極的に関わらずにいた。プールの時間が終わる直前に『洗濯機（ぐるぐる走って水流をつくり、最後は伏し浮きや『ワニ』をして浮力や流れを体感する遊び）』をして遊んだときに、はなこちゃんが初めてビート板を使って、自ら水底を足で蹴り水に浮いた。恐る恐るではあったが、自らの意思で動いたということに感動した私は「今、はなこちゃん自分からやってみたやん！すごいやん！水に浮かんでた！」と声をかけに行く。特に表情は変わらなかったが、はなこちゃんにとって自ら動き出すということがどんなに勇気を振り絞った事だっただろうと想像すると、胸がいっぱいになった。その後、水の流れにのって何度か同じことを試すはなこちゃんの姿があった。

<考察1>

次の週、私は休みだったが、一緒にプールに入った4歳児の担任に「ビート板使いたい」と伝えにきたということだった。はなこちゃんが主体的に遊ぼうとしていたのだと思い嬉しかった。

それからのプールでは、ビート板を握りしめて何度も底を足で蹴って水に浮かぼうとするのはなこちゃんの姿があった。今までの固まった表情ではなく笑顔もたくさん見られるようになる。「この壁の所蹴ってビューンってするとロケットみたいに進めるよ」と誘い一緒にやってみると「先生、ロケット一緒にしよう」と今度は、はなこちゃんから誘いに来るようになり日に日にプール遊びを楽しめるようになっていった。

顔をつけられるか・つけられないかだけにこだわらず、ビート板という用具を使って自ら動き出したことは、はなこちゃんにとって大きな変化だった。また、“水遊びって楽しい！水に体が浮くって気持ちいい！”ということ自らの1歩で体験できたことで、こだわりが和らいだのではないだろうか。

顔をつけられるようになりたいというはなこちゃん自身の目標とは違ったかもしれないが、遊びの中で新たに心動かされたことがあり、それを自らの1歩で手に入れたことが心の育ちだと考える。

私自身の気付きも大きかった。しんじくんの姿がヒントになり『こだわっている私』に気付くことができた。

<考察2>

結局プール最終日でも、はなこちゃんは顔をつけられるようにはならなかったが、プール遊びを十分に楽しみ、友だちと関わりあって大きなビート板に乗って大騒ぎするなど笑顔が多くなり、やわらかい表情であった。そのようなはなこちゃんの姿を母親に伝えるが「うちの子だけ顔がつけられないんですよね」と気にしておられた。しかし秋頃には「そんなこともあったかしら？」と思う程度に熱は冷めていったようだった。

9月には、容易にできなかった竹馬にもコツコツと取り組み、できるようになると何度も繰り返し乗ることを楽しむ姿が見られた。自分より先に他の友だちができるようになった技（ジャンプやケンケン）も、「はなこちゃんはまだできひん」と言うものの、投げやりな言い方ではなく友だちの様子をよく見て後に同じことをやってみようとするようになった。

プール遊びが終わった後は、新しい遊びにも興味があれば素直に「はなこちゃんもやってみよう」と言葉にすることも増えてきた。転園してきた直後は「はなこちゃんは別に前の園にもどるからいい！」と肩肘をはっていたが、今の園に馴染んで、クラスの中に自分の居場所ができて、少しずつ心の鎧がとれていき今の姿があるのかなあと感じる。自分でできないときには「ちょっとこ手伝って」と言いに来たり、できなくてもその遊びそのものを楽しんでいたり、はなこちゃん的笑容が増えていっている。

研究プロジェクトでのエピソード検討会の中で、教育熱心な母親の影響を強く受けて育っているはなこちゃんの背景というものを改めて感じた。私自身、心のどこかで“お母さんが必死すぎるから考え方が固くなってしまわないのかな？”とマイナスに思っている所があった。でも皆さんの話から“母親ははなこちゃんのことを一心に思って、必死に子育てしているだけで、ただその方向性や熱心さははなこちゃんの今の姿につながってしまったのだろう”と思いを巡らせるようになった。では保育者としては母親に対してどのようにアプローチしていけばよかったのだろうという課題も見えてきた。

できる自分にこだわってしまうはなこちゃんの姿はどこからきているのか？ということを見ると、私を含め周りの大人の価値観や関わり方が大きかったのではないかと思った。“はなこちゃんが顔をつけられるようにしてあげたい”と強く願っていた私も母親も、結局は顔がつけられるはなこちゃんを目指していたのだ。何かができるという能力への自信（条件付きの自信）ではなく、ありのままの自分でいいんだと感じて、だんだんと素直に自分を出すようになっていったはなこちゃんの姿を通して、子どもの心に向き合うことの大切さを感じた。

今回エピソードを書く中で、できたことそのものではなく、頑張ろうと思えたことを誇らしく思えるような関わりとはどのようなものだろうかと考えさせられた。「できたことを認めることは諸刃の刃です」というアドバイザーの先生の言葉が心に刺さった。

検討会の中で誰かと比べたり、周りの大人の基準で捉えたりするのではなく、本人にとってのできるが大事だということ改めて学んだ。周りが見てどうであれ、本人が「私ってすごい！」「ぼくできた！」と思えることを大切にしていきたい。

7月当初のパンパンに膨らんでいた風船の空気がシュッと抜けたように「お風呂での顔付け、やらなくなりましたね～」とあっけらかんと笑う11月頃の母親。時を同じくして、友だちに認められ頑張り過ぎなくても楽しいことがたくさんあるのだと経験し、少しずつ変化するはなこちゃん。そんな素直なはなこちゃんの変化を嬉しく思う私。それぞれができるへのこだわりが和らぎ、相互作用の中で“ありのまま”でいられるようになったのだと思う。このことが、はなこちゃんにとっての心の育ちではないだろうか。



先生，手伝って

<背景>

たいちくんは、5歳児の男児（6歳2か月）である。父・母・たいちくんの3人暮らしで、年の離れた姉がいるが自立しているため、一人っ子のような生活をしている。両親は共働きで、母親は物事にあまりこだわらずさっぱりしており、良くないことははっきりとたいちくんに伝える。たいちくんとのお話は対大人のようであり、たいちくんに褒めたり、たいちくんが甘えたりする姿はあまり見たことがない。私が良い姿を伝えると、照れ隠しなのか、冗談で返すことが多い。母親は、たいちくんのプライドが高く負けず嫌いな所が気になっているようで、そのことに関わる話になると、真剣に耳を傾ける様子がある。

私は4歳児から担任しているのだが、たいちくんは4歳児の頃からよく話を聞いて理解が早く、身辺自立していたため、園生活で困ったり私の手を借りたりすることがなく、一対一での密な関わりは少なかった。また、知的好奇心が高く、覚えることが好きで、特に大人との会話を楽しみ、いろいろな話を積極的にする。一方で、自分の知らないことがあると強がってついマイナスな発言をすることもある。鬼ごっこやリレー、綱引き、クイズ、カードゲームなどの勝負事が好きで、自分から進んで遊びに参加するが、負けず嫌いだったり、プライドが高かったりして、負けると相手を怒ったり強がってその場を離れたりすることがよくあった。“ありのままの思いを素直に出し、勝ち負けにこだわらず人と関わって遊ぶ楽しさを十分に感じてほしい”と願い、たいちくんの負けて悔しい思いを私が代弁するようにしてきたことで、園で素直に自分の感情を表し、泣く姿も見られるようになってきていた。

5歳児になる際にはクラス替えはなく、クラス全体的に落ち着いて進級し、友だち関係も良好であった。たいちくんは特定の男児4、5人で氷鬼をしていることが多かった。体を動かすことが好きだが、少し不器用で、体が思うように動かせなかったりして、竹馬や縄跳び、鉄棒などの運動遊びには自信がなく、自分からは取り組みにくい様子がある。6月末に親子で竹馬をつくるものの、難しいと感じたのか、一度も自分からは触ろうとしなかった。真面目な子どもたちなので、私が誘えばやると思うが、“自分からやりたいと主体的に関わってほしい”と思い、見守り待っていた。結局一度も竹馬に触らずに9月になった。

<エピソード 1 チャレンジタイム>

9月に入り、竹馬に挑戦する子どもたちが増えてきたものの、たいちくんは仲良しのグループでひたすら氷鬼をしていた。私は引き続き、たいちくんたちの心が動くタイミングを待ち、様子を見守ったが、氷鬼が楽しくて毎日繰り返しやりたいというよりは、竹馬に挑戦してみようという気持ちが出なくて、同じように感じている子どもたちで集まっているように感じた。

そこで、1歩勇気を持つきっかけになればと、降園前の15分程『チャレンジタイム』と称し、クラスみんなで取り組む機会をつくった。その中で、一人一人の思いを汲み取り、私との一対一の関わりを大事に言葉かけすることを意識した。たいちくんたちも自分で竹馬を持って来るようになった。少し片足を乗せるが、難しさを感じてやめ、近くの友だちと話をし、時間がきたらすぐに片付けに行く。足が痛くて怖いと思いながらもまずは1、2歩に挑戦する友だちを紹介すると、たいちくんたちは「え～無理！」と言う。私はすぐに「そうやで、すぐには乗れへんねん。〇〇ちゃんも今日初めてしたわけじゃなくて、毎日痛いし怖いけど頑張って頑張って、まずは1歩、次は2歩目指してはんねん。今日1歩歩くのが無理でも、まずは自分で竹馬持って来て触っただけで素晴らしい！自分で裸足になって足のせたやろ？今日はそれがすごいことやで！みんな自分に拍手！」と話す。すると「え～」と笑いが起こり、たいちくんも友だちと顔を合わせて照れながら拍手をしていた。

<エピソード 2 先生、手伝って>

好きな遊びの時間にも、竹馬に挑戦する子どもが増えてきた。たいちくんも気になっている様子である。『チャレンジタイム』になると、いつも一緒に遊ぶ友だちが「1人でできひん…」と私に言いに来た。私は「そうやな、でも大丈夫！先生言ってくれたらいつでも助けるし！」と伝えると、その友だちは「先生持って」と言う。このやり取りを見て、たいちくんが初めて「先生、手伝って」と言ってきた。自分の苦手なことや言いにくいことを素直に出してくれたことが嬉しく、その気持ちを受けとめて時間のある限り関わろうと思った。その日は順番に助けに回り、たいちくんと2回一緒に歩いた。たいちくんは緊張して全身に力が入りながらも頑張って取り組んだ。私はたいちくんに「難しいけど、先生手伝ってって自分から言って挑戦するのがすごい！今日も頑張ったやん」と力を込めて伝えた。

毎日の運動遊びの取組や昨年度までの経験から、子どもたちから運動会の話題がちらほら上がってきたので、どんなことをしたいか何に挑戦してみたいかみんなで話し合った。その中で、竹馬や縄跳び、跳び箱、鉄棒などが出てきた。“これは難しくてできないからしょうがないしこれにしとく”“みんながしてるからしょうがないしやる”というような気持ちではなく、少し難しいかもしれないけれど、できる・できないではなく、自分なりに挑戦しようとする気持ちを大事にしたいと思い「どの遊びも『難しいしやらへん、また今度する』って言ってたらいつまでたってもそのままやねん。よしこれやってみようって自分から挑戦するのが大事」という話をした。その日の午後、たいちくんは好きな遊びの時間に初めて自分から竹馬を持って来て取り組む姿があった。

<エピソード 3 初めて足挟めた>

たいちくんが、自分から竹馬を持って来て私に竹を支えるよう頼んできた。私は自分から勇気を出して取り組もうとするたいちくんの気持ちと素直に伝えてきたことを嬉しく思い、“この日はとことんたいちくんに関わろう”と思った。何度も取り組むうちに、少しずつ竹馬にかかる力が抜けてきたので「力が軽くなってきたよ！いい感じ！」と伝えると、たいちくんは「初めて足挟めた」と嬉しそうに言った。プライドや理想が高いたいちくんが、乗れた歩けたの結果ではなく、足が挟めたという初めの小さな1歩を自分で認められたことに感動し、私は「すごい！それ大事！」と思わず叫び、たいちくんの喜びに共感した。降園前に、たいちくんに「今日頑張ったな」と声をかけると、「初めて足挟めた」とまた嬉しそうに伝えてくれた。そのことを含め、たいちくんが今少しずつ苦手なことにも向き合っていることを母親にも伝えると、恥ずかしそうに笑いながらも喜んでくれた。

その日以降も、たいちくんは自分から竹馬を持って来て、私がいなくても自分で何度も足を乗せては1、2歩を目標に繰り返し挑戦していた。私が手伝うと「痛～っ！！」と足を抑えながらも、どこか誇らしげで嬉しそうに笑う。

<エピソード 4 あきちゃんのアドバイス>

世話好きで優しい同じクラスの女兒あきちゃんが（あきちゃんも竹馬に苦手意識が強かったが、何日も悪戦苦闘し、ようやく歩けるようになり自信を感じていた）、竹馬に乗りながらたいちくんに近づき、「ゆっくりより、早歩きの方が歩きやすいで」と声をかけた。それまで女兒の発言に耳を傾けるようなことが無かったたいちくんが、あきちゃんのアドバイスを受け入れて何度か試みているのに私は驚いた。何回目かでトントンと2歩自分で歩くと「乗れた…！」と思わず嬉しそうな声が漏れた。あきちゃんも周りにいた子も「たいちくん乗れたん?!」「もう少しで歩けるやん！」と驚いていた。私もあきちゃんたちと一緒に喜んだ。まだ足の痛さと恐怖心があり、その日はその1回きりだったが、満足そうな表情があった。

運動会に向けて自分の挑戦するものを決めて取り組むことにすると、たいちくんは大縄跳びを選んだ。大縄も得意という訳ではなく、初めはみんなの前で跳ぶことを躊躇していたが、いつも一緒に遊ぶ友だちが挑戦するのを見て、大縄跳びにも自分なりに一生懸命取り組むようになった。少し難しいけれどやってみたくと自分で決めた大縄で自分なりに挑戦する姿を大事にしたいと思い、私はたいちくんの大縄の挑戦を支えることにした。特に互いにライバル意識があるだいきくんとは回数を競うように励んでいた。また、他の友だちの技を見て素直にすごいと感じ、しゃがんで跳ぶという難しい技にも自分から挑戦していた。運動会では、今自分にできることを精一杯取り組み、たくさんの人に見てもらい、自信となった。

運動会の翌日は、みんな達成感と自信に溢れ、引き続き取り組んだり新たなことに挑戦したりする姿があった。良きライバル関係のだいきくんがこれまで避けてきた竹馬に自分から挑戦していた。私が驚くと、「歩けるようになってみせる！見ててな！」と意気込む。それを見て、たいちくんも竹馬をとってくる。2人とも私が支えながら、10歩、20歩と歩く。その度に、足が痛いのを我慢しながら相手の歩数を越えて歩くことを互いに繰り返す。だいきくんは66歩、たいちくんは50歩まで私と一緒に歩いた。昼食後に2人ともまた挑戦し、だいきくんが初めて1人で歩く。「やった！たいちくん、おれ乗れたで！」と言った。その言葉を聞いて、たいちくんは無言でひたすら挑戦していた。

<エピソード 5 たいちくん、頑張れ、後少しやで>

だいきくんは何度も自分で歩いては「先生！見てて！〇歩いけた」「次は〇歩！」と楽しそうに乗っている。たいちくんはその姿を目の前にながらも黙って取り組んでいた。私がたいちくんを何度も支えているのを見て、だいきくんが隣に来て「たいちくん、頑張れ、後少しやで」と励ました。あきちゃんたち女兒も近くに来ては「早歩きの方がいい」「もう少し前に倒して！」「たいちくんくん頑張れ」と何度も声をかけていた。たいちくんは返事はしないものの、休むことなく挑戦していた。そして、私ではなく女兒たちが竹馬支えるのを受け入れ、背中に手を添えて少し押すだけで、1人で竹を動かして歩けるまでになった。

<考察1>

リレー遊びでは、負けず嫌いで勝負にこだわりを持つたいちくんは、初めのうちは、勝つと相手チームをからかうように笑ったり負けるとイライラして素直になれなかったりすることがあったが、チームの友だちと何度も勝ち負けを経験するうちに仲間意識が芽生え、友だちを一生懸命応援したり、負けても「くっそ～！次は絶対勝つてやる！」と相手を責めずに前向きに取り組んだりする姿が出てきた。たいちくんのチームは最下位で負けることが多かったが、ある日、1位と僅差で2位になり、チームもいい雰囲気でも満足感を感じていたとき、ぐちゃぐちゃになった自分のチームのゼッケンを見て、黙って自分からみんなの分をきれいに畳んで片付ける姿が見られた。結果でなく、思いきり仲間と競ったり応援し合ったりすることの楽しさを感じているのではと感じた。

また、先日4歳児が相撲遊びをしていたときに、たいちくんも入って来て、えみ先生（たいちくんはいつも強がりやわざと反対の態度をとったりして、反応をためすような関わりをする先生）と一対一の勝負をし、えみ先生は一瞬、自分が勝ったらそっぽを向くかなと迷ったようだが、真剣勝負でたいちくんに勝った。すると、悔しそうにながらも逃げずに何度も相撲遊びを楽しんだようで、えみ先生はその心の変化に感動し、私に教えてくれた。年下の4歳児には、少し遠慮気味で負けても受け入れていたようだ。竹馬などの様々な運動遊びへの取組の過程で、苦手なことや難しいことに少しずつ向き合ったり、自分の良い所も弱みも両方受け入れ、みんなの中で素直に出せるようになりつつあるたいちくんの心の変化や育ちを感じた。

<考察2>

最初の考察では、その後のたいちくんの姿から、心の変化や育ちを感じたことについて述べた。ここでは、エピソード検討を通して改めて見つめ直した「なぜそのような変化や育ちが見られたのか」について、より深く考察してみたい。

プライドや理想が高く負けず嫌いなたいちくんが、どうして苦手なことに向き合ってすぐにできなくても繰り返し何度も取り組めたのか改めて考えると、たいちくんのありのままの姿を受け入れ、結果でなく自分でやろうとする気持ちや少しの変化を認めてくれる大人や友だちの存在が大きかったのではないかと思う。うまくいかないこともあるが、「これでいいんだよ」と言ってもらうことで安心してありのままの自分を出しながら苦手なことや自分の気持ちに向き合っていたのではと思う。普段の強がった姿や負けず嫌いな部分は、自信のなさからきているところが大きく、普段から、本当はもっと見てほしい、認めてもらいたいという思いがあるのではと改めて感じる。

この竹馬や大縄などの遊びを通して、私がたいちくんに伝えなかったことや育てたい心は、できるようになることや難しいことから逃げないことでなく、ありのままの今の自分を受け入れて、こうなりたいと前向きに取り組もうとする気持ちである。「難しいことから逃げるな、頑張れ」でなく、苦手なことや避けたいことは誰でもあり、「難しい、無理」と思うのは素直な気持ちで、その思いをありのまま出した上で、難しいと感じたときに「助けて、手伝って」と言えること、そして助けてくれる人が必ずいること、一緒に頑張ったり応援してくれたりする仲間の刺激を受けながら、できる・できないでなく、自分なりに取り組むことが大事だと感じてほしかった。自分の苦手なことや弱みを受け入れることや結果でなく自分なりに取り組む姿勢は、自分は自分でいいんだと自分を認められることや自己肯定感につながると思う。そこでの満足感が、周りの人も認められる姿につながるのではと思う。

一方で、運動会までの取組で自分なりの挑戦に達成感や自信を感じていたたいちくんだったが、運動会翌日のだいきくんと練習は、“だいきくんに負けたくない”“だいきくんができるなら自分もできるはず”と決してマイナスな気持ちやだいきくんの頑張りを否定したり認めなかったりする姿はなかったものの、たいちくんの様子は楽しいというよりは必死だった。その頑張りに何とか私も応えたいとサポートしたが、結果ではなく自分なりに挑戦する気持ちが芽生えていたたいちくんに、何か他の援助がなかったかと考えさせられる。11月に入り、三角馬という新たな挑戦遊具を出すと、数人の男児が毎日何度も挑戦しては転び「難しい～でもおもしろいわ～。これ欲しかったなあ」と楽しそうに遊んだ。その子どもたちは理想が高く、なかなか人前で失敗できず、いろいろなことに尻込みするところがあり、竹馬にもほぼ触らなかったが、三角馬ではいろいろな技を習得するほど夢中になって生き生きと遊ぶ姿があった。その姿を見て、改めて一人一人それぞれの興味、好きなこと、得意なこと、やりたいこと、タイミングは違い、それぞれの子どもへの援助の仕方があり、その子らしさを引き出し、可能性を広げていくことが大事なのだと感じた。



頑張ってたのに

<背景>

5歳児クラスは、ダウン症の子ども1名と配慮が必要な子ども5名を合わせた20名を2人の保育者が担任している。5歳児女児のなぎさちゃんは父、母、兄2人の5人家族で小学5年生の兄は配慮の必要な子どもである。なぎさちゃんは、小さい子どものお世話をするのが好きで、園庭では年下の子どもや配慮の必要な子どもと遊んでいることが多い。クラスでは1人で遊んでいることが多く、廃材や画用紙などを使って家をつくり、その中に自分がかいた人や動物を住ませ、ごっこ遊びを楽しんでいる。集中して遊んでいるときはいいのだが、遊びに気が向かなくなると「〇〇ちゃんが片付けをしていない」「〇〇くんが、順番抜かしをした」など、友だちの指摘ばかりをしていた。また、配慮の必要な子どもとして認定されており、発達の遅く、人の気持ちを感じるのが苦手なところがある。

なぎさちゃんのことは「友だちに意地悪して、それを他の友だちに指摘されて30分大号泣でした…」「どうしてあげたらいいんでしょうね」などと職員間でよく話された。私（副所長）自身も本児にどう接したらいいのかわからない状態だったが“私たちが本児のこを受け止めているだろうか”と疑問がよぎった。担任に「先生はなぎさちゃんのこと好き？かわいいと思ってる？」と聞いた。すると担任は苦笑いをし、言葉がでて来なかった。「保育者でもかわいくないと思ってしまう子もいるかもしれない。それをかわいくないというだけでほっといたらその子は救われない。私たちはプロなんだからその子の背景を理解し、あえて好きになるように関わらないとあかんのちゃうかな？」とそんな話をした。その後、なぎさちゃんの話が職員間で頻繁に上がるようになった。「なぎさちゃんに寄り添ってみたけど、結局叱ってしまいました。そのあと大号泣でした…」など、なぎさちゃんとの関わりを改善しようと試みるが、うまくいかなかったという日が何日も続いていた。

<エピソード>

休憩に行く担任の代わりに5歳児クラスに行った。なぎさちゃんは毛糸の編み物をしていて、編み目がとんでいて、修正ができない状態であった。担任が「なぎさちゃん、やり直さなあかんし、はずすね」と声をかけていた。私は担任とのやり取りを引き継ぎ、なぎさちゃんの編み物の修正を始めた。もう一度できるように修正していると、なぎさちゃんは、その毛糸を机の下に放り投げた。「なぎさちゃんのために毛糸の準備しているのに、なんでそんないらんことすんの？」という感情が沸き上がったが、“ここで叱ってもまた泣いてしまうだけだ”と思い直し「先生、なぎさちゃんのおおしたいんだけど？」と優しい口調で話しかけた。すると「赤色が、先がいいんだもん」と訴えてきた。「わかった、じゃあ、この色を外して、赤色の毛糸にするね」と伝え、枠に赤色の毛糸を付け始めた。すると、今度はそばにあった毛糸を机の下に落とし毛糸をけりだした。心にブレーキをかけながら「それは困るわ」というが、自分の憤りが漏れてしまったのか、なぎさちゃんはしくしくと泣き出し座り込んだ。その後私の背中にくっつき泣き続けている。「なんで悲しいの？」と聞いても全く話さないが、背中にくっつき離れようとはしない。“あー、結局また同じことになってしまう。どうしよう”と困っていたとき“もしかして、毛糸を枠から外す段階でくじけていたのかも？”と思い「頑張ってたけど、やり直しになったから悲しいの？」と聞くと「うん」と頷いた。「なぎさちゃん、頑張ってたもんね」「今日もうやりたくない？」と聞くと「うん」というが、そばを離れずにいた。しばらくして、表情がパッと明るくなり「赤色から始める。先生手伝って」と言うので、そのまま編み物を続けた。なぎさちゃんは、私の膝の上ののって編み物をした。会議の時間が来たのでその場を離れ、おやつの後、部屋をのぞくと編み物をしているなぎさちゃんがいた。「なぎさちゃん、上手にできてるね」と声をかけると「うん」と弾んだ声で返事をして黙々と編み物を続けた。

<考察 1>

事前になぎさちゃんに対してどう向き合えばよいのかと、職員間で話があったからこのような対応をしたのだと思う。その話がなければ、なぎさちゃんが毛糸を机の下に放り投げたときに叱ってしまい、なぎさちゃんの本当の気持ちには近づけなかったかもしれない。

心の育ちを考えると、その子のことを愛おしいと感じて接することが大切だと誰もが思っているだろう。この仕事をしていて「〇〇ちゃん、かわいく思えないんですよ」なんて相談はあまりしたことがないのではないかな。保育者は子どもたちのことを愛して当然という考えがあるだろうが、保育者も人間だ。苦手だと感じる子や上手く関係が築けない子もいると思う。その感情の背景には、いったい何が隠されているのか。そこを議論し、理解していくことが必要だと思う。例えば、自身の生い立ちや経験などが関係しているかもしれない。自身で、または職員間で深く掘り下げてみると、何か答えが見つかるかもしれない。

自園は『主体としての心を育てる保育』を目指し保育している。心を育てようとするなら、保育者が子どもの心をどうくみ取るか、その子の心の動きをどう捉えるかが大切であり、一人一人の子どもの心にどのように向き合っていくのかを考えなくてはならないと思う。

<考察 2>

毎年なら「入学式の後にランドセル見せに来てね」などと声をかけ送り出すが、今年はコロナの状況もありそのようなわけにはいかなかった。そのため園にランドセル姿を見せに来てくれる子どもが少なく寂しい気持ちではあった。ある日「なぎさちゃんがお母さんと一緒に会いに来てくれましたよ」と事務所に声がかかった。小学1年生になったなぎさちゃんが、園にお母さんと一緒に会いに来てくれた。園庭で待つなぎさちゃんに「ランドセル見せに来てくれたの。ありがとう」と声をかけると「先生、テストで100点いっぱいだったよ」と笑顔いっぱい報告してくれた。その笑顔を見て、嬉しくなり「すごいねー、頑張ったねー」と声をかけると「やったー」と飛び跳ねて笑顔を返してくれた。

本児のことを十分理解することができなかったのではないかな、十分に愛情を注ぎたいだろうかとの反省の気持ちは残っているが、この日“私たちが嬉しいことを伝えたい人になっていたんだな”と感じて、心の引っ掛かりが少し軽くなり嬉しい気持ちになった。

なぎさちゃんのことを理解し、愛情を持ちたいと、職員間で話をしてきた。今回のエピソード検討会でも、たくさん意見をもらい、新たな気づきや再確認ができた。なぎさちゃんの30分も号泣するなどの行動は、大人と長く関わりたい、反応が欲しい気持ちがねじれて表現されているのではないかな。配慮が必要な兄のこと考えると、そこまでしないと関わってもらえない背景があるのかもしれない、などと園で話し合った。

他児へ指摘が多いのも、本児がそのように関わられているのかもしれない。家庭では“できるのが当たり前だ”とできないことばかりに目を向けられていないだろうか。また、そこには保護者の“できる子であってほしい”“しっかりと育ててほしい”という強い思いがあるのかもしれない思いを巡らせた。そのように考えると、なぎさちゃんへの感情は“ただかわいく思えない”ということから変わっていくのではないかな。また、本児の特性についても考えてみるなど深く知り、考えることで、その子への感情も変化することがあるのではないかな。

また、保育者自身の育ちや経験、考え方などが知らず知らずのうちに子どもへの感情や関わり方に関係している事にも改めて気付くことができた。保育者自身の感情もエピソード検討会を通じて話し合い、保育者も受け止められ、補い合いながら保育が進められたら子どもも保護者も保育者も居心地の良い園になるのではないだろうか。



ラグビーのチーム分け

<背景>

やすおくんは5歳児の男の子、姉、兄、本児の3人姉弟で父母との5人家族。活発な遊びが好きで、日頃から仲の良い友だちと、サッカーやラグビー、鬼ごっこ等で盛り上がっている。負けず嫌いで、勝負に負けたり、鬼ごっこで転んだりすると拗ねたり、機嫌を損ねる事もしばしばあった。運動遊びでは自信满满的な一方、得意分野以外では失敗を恐れて慎重になるような一面もある。ただ、それらを補って余りあるパワーがあり、友だちを引っ張っていける力があると私（担任）は捉えていたので、自己中心的な価値観の殻がいまひとつ破り切れていない姿に少し勿体なさを感じていた。

5歳児を中心にラグビーがブームで、毎日遊んでいた。私は、ラグビー遊びを、たくさん子どもたちが安心して遊ぶ時期から、自分たちで遊びを準備し、先生に頼らずに遊び進めてほしい時期に来ていると考えていたので、「困ったら相談に乗るし、自分たちでチームを決めてみて」等といった言葉かけなどを行っていた。その中で、うまくいく日もあれば、やすおくんがラグビーの上手なたかしくんと示し合わせて常に同じチームになるように誘導したり、勝手に決めてしまう姿もちらほら見られたりしていた。

<エピソード 1>

やすおくんは友だちと一緒にラグビーをしようと、中心になってチームを決めていた。私は誘われたが、「後から行くよ」と声をかけ少し離れた所から見守っていた。やすおくんが取り仕切って遊びが始まったが、明らかにチーム編成が偏っており、やすおくんがいるチームが一方向的に攻めて点を取り続けていた。私はそれに気付くにつも、やすおくんに友だちの思いを話すチャンスと捉え、しばらく見守っていた。一緒に遊んでいた友だちが1人2人と抜けていき、やすおくんの相手チームだったよしひろくんが怒ってその場を離れた所で遊びが成立しなくなった。そこで私はやすおくんに「今よしひろくん、すごく怒った顔で向こういかはったけど、どうしたの？」と問いかけた。

「ラグビーしてたら、皆やめた」「なんで皆やめたの?」「さあ?」「ラグビー、(スコアは)何対何やったん?」「…。2対2くらい」すると、ここでよしひろくんが「違うで! 5対0や。守ってばかりでおもない」と怒りながら言った。私はそれまでのやりとりと、バツの悪そうなやすおくんの表情から、やすおくんは自分がした事がちょっとずるいことだとわかった上で行動に移し、今それを先生に怒られるのではないかと考えていそうだと察した上で、「やすおくんとよしひろくん、言ってることが違うよ」と問いかけた。無言で泣き出したやすおくんに対し、私は叱るのではなく、私の思いを丁寧に伝えたかったので、やすおくんのプライドに配慮するため、静かな職員室に場所を変えて一対一で話す事にした。

職員室で「何があったの?」と問いかけた。やすおくんは黙ったり、核心に触れないような話をしたりしていたが、私は先ほどの園庭でのやり取りで、自分のした事や何を言われそうなのかを理解している確信があったので、「なんで皆ラグビーやめたかわかる?」と、話を切り出した。やすおくんは黙って俯いたので、「なんでやすおくんのチームばかり上手い人がいたの?」と尋ねると、もう一度泣き始めた。私は彼の黙った姿を“自分のしたことのずるさを自覚しているからこそそのバツの悪さと話しにくさ”ではないかと考え「やすおくんのチームは勝って楽しかったかもしれんけど、ずっと負けてたよしひろくんは楽しかったと思う?」と、次の言葉を投げかけてみた。それには首を横に振る返答があったので、「そうね、先生も負けてばかりは面白くないかな。ラグビーとか、みんなで遊ぶのって、自分だけ楽しければいいの?」と再び問いかけた。やすおくんは首を横に振った。「みんなが楽しいのって、どうすればいいんやろうね。前にたかしくんがチーム分けしたときは、みんなやめなかったね。何が違うかわかる?」という問いには、はっきり「う

ん」と頷いた。たかしくんは、必ずチームを均等に分けたり、全くのランダムに決めている事を、私もやすおくんもよくわかっていた。「スポーツは勝ったり負けたりするから面白いねん。やすおくんも負けてばかりは嫌でしょ。チーム分けは、みんなが楽しめるように考えなあかんね」と伝えた私に、やすおくんははっきりと視線を返し、首を縦に頷いた。最後に、私が「やすおくんはラグビーも上手やし、これからもみんなと一緒に遊びをすすめたり、盛り上げたりしてほしい。上手いし、力もあるからこそ、皆が楽しくできるように考えてほしいな」と伝えると、やすおくんの涙はまだ止まっていなかったが、真剣な顔で話を聞き頷いた。やすおくんに私の思いが伝わったと感じた。そこで、私は口調と表情を切り替えて「話はおわり。遊ぼうか。もういっかいラグビーやる？」と誘いかけた。しっかりと頷いたので涙が止まるのを待って、やすおくんと一緒によしひろくんたちを誘い、ラグビーを再開した。

<エピソード 2>

数週間後、やすおくんを含むいつものメンバーがサッカーゴールを動かし、久しぶりにサッカーを始めた。私は2階の保育室にいたため、サッカーが始まる際の言葉のやり取りはわからなかったが、子ども同士で話し合った後、やすおくとたかしくんは別々のチームでそれぞれのチームメイトを引っ張り、サッカーを楽しんでいた。しばらく見ていても試合は均衡しており、ゴールキーパーも自分たちで話し合って交代していた。あまりサッカーが上手でない子ども自分の居場所を見つけ、楽しめる雰囲気の中で誰もサッカーをやめる事無く続ける姿が見られた。私はその雰囲気をとても嬉しく思い、しばらくは子どもたちの雰囲気に余計な外部刺激を与えないよう黙って我慢していたが、ある程度時間が経過した後は、2階からいいプレーをした子にその都度声援を送っていた。それに子どもたちも気をよくしたのか楽しそうにプレーし、終わった後もやすおくんや他の子ども「さっきの上手やったやろ」と私に楽しそうに話してくれた。

また、別の日にはやすおくとたかしくんが同じチームになっていたが、サッカーで遊んでいる子は7人で、やすおくとたかしくんがいるチームは1人少ないことに気が付いた。相変わらずやすおくとたかしくんの動きは目を引くが、一方のチームも1人多い分しっかり対抗できるようで、皆でサッカーを楽しんでいる姿が見られた。人数比でバランスをとった感覚に感心しながら別の子と遊びながら眺めていると、4人チームだったほうが1人やめた。やすおくんが「そっち1人やめたから先生そっち入って」と私を誘い、参加することになった。チームバランスを意識した言葉が自然に出てきたことが嬉しかった。一緒に遊んでみると、確かに誰もチーム分けには不満に思っていない事が感じられ、その日も時間いっぱいサッカーを楽しんでいた。

<考察1>

普段から子ども一人一人に合わせた保育をするために、一人一人の育つ先のことも考えている。やすおくんの今の力を鑑みて、やすおくんならできること、できるようになってほしいことを考えていると、友だちを引っ張っていくようなエネルギーは大切にしつつ、その中で、自分ではない相手の気持ちにも思いを巡らせ「自分もみんなも楽しいってどういうこと？」といったことをどこかで伝えられたらと思っていた矢先のエピソードであった。エピソードとして記述し、振り返ったことで、やすおくんが“必ずチーム分けは均等に”とか、“こうやって決めなければ”といった形にこだわらず『みんなが楽しい』という状況が大切だと考え、それを何となくでも感じられるようになっている姿が見られるのはとても嬉しかった。エピソード2では、やすおくんの心の育ちがわかる核心的な発言や行動を記録としては残せなかったが、チーム分けが一つの平等な良い方法ではなく、様々な形で行われていたことから“先生に怒られたから、先生の言われた通りにしている”という状態ではないとわかる。私は、ここにやすおくんの心の育ちを感じた。やすおくんの中で、自分以外の人の気持ちを思い、みんなで遊ぶことが楽しい、みんなが楽しいと思うことが嬉しいと思えるような、目に見えない心の育ちがあったのだと願う。

<考察2>

研究プロジェクトのエピソード検討会の中で「子どもたちに任せたらどうだったのだろう」という問いかけがあった。確かに子どもたちに任せるとする方法もある。その問いを受け、なぜ一対一で話をするという方法を選択したのか自問した。やすおくんを担任として日々見てきた中で“もう1歩成長してほしい”“やすおくんならできる”と感じていたことを伝える環境として今が丁度良いタイミングだと感じたからである。今のやすおくんなら、私の話を受け止め、考えてくれるのではという期待と信頼関係が私の背中を押したことと、やすおくんの性格を踏まえ、彼のプライドに配慮した側面もあり、職員室での一対一という環境を選んだ事がエピソードを振り返ると自分でもよくわかった。

また、検討会で話を進める中で、“保育者が主導すること（しているように見えること）”や、“対応が厳しいのでは”といった話題もあり、保育者の行動の意図を確認する場面が多くあった。エピソード1の職員室でのやり取りでは、やすおくんから次々と言葉が出てきたわけではない。お互いの応答の際も“この言い方で伝わっているか”と本児の様子を確認し、言葉を発していないその時間には、そこに本児の思いがあるかを感じようとしていた。“難しい内容だけど伝わるかな”という思いもあった。ただ、エピソード2での子どもたちの姿から、“友だちの思いもわかってほしい”という私の願いは、やすおくんや他の子どもたちにも届いたような気がしている。

幼児教育において、子どもたちが自分で気付いたり、世界を切り開いたりしていくことはとても重要である。ただ、それと同時に保育者は保育者としてその子の成長の為に伝えなければならない事もある。そのとき一方通行にならないように配慮を重ね、子どもが「怒られたから」「先生がそう言うから」という理由で行動を取らないよう、子ども自身が咀嚼し、自分なりに考えられるよう関わりたい。子どもの心の育ちは何がきっかけになるかわからないので、そのときそのときの子どもの様子に合わせて保育者の関わり方を考えていきたい。



僕を見て！何でも一番ですごいんだ！！

<背景>

たつやくんは、小学校1年生の男児。父、母、妹、たつやくんの4人家族。

入学当初、毎日明るく笑顔で学校生活を送っていた。歴史が大好きで戦国時代のことを目を輝かせて話してくれたり、絵をかくて嬉しそうに見せてくれたりした。また折り紙が得意で、複雑なコマを作ったりする。親切にしてくれたお礼にと、その子どもの分だけではなく班の子どもの分までコマを作って持ってくるような優しいところがある。

クラスはみんな穏やかでとても仲が良い。たつやくんは、勉強も運動もできることから、クラスの子もたちからは一目置かれていた。一方、自分ができることをひけらかしたり、友だちに偉そうにしたりする姿や、強い口調で言うことによるトラブルが多く気になっていた。「自分は何でもできる」「他の人よりもよく物事を知っている」と思っている様子が見受けられた。

学校での様子を母親に伝えるものの「うちの子がまさか」との思いで受け取られているところがあり、たつやくんが学校で見せる顔と家で見せる顔は違うように感じていた。

<エピソード 1 先生は、子どもの芽をつぶすのですか>

たつやくんが「友だちにあげたい」とたくさんのコマを作って持ってきた。私（担任）は「すごい！友だちのために折ってきたの？優しいね。でもみんなにあげる分がないから、どうするか後で考えようね」と言ったものの、その日の内に返事をするのを忘れていた。たつやくんは家に帰って「先生があかんって言った」と話したのか、次の日、母親が「先生は、子どもの芽をつぶすのですか！」と言ってこられた。母親には、返事を忘れてしまっていたことを謝罪し、友だちのために折り紙でコマを作ってきたたつやくんの気持ちを素晴らしいと思っていることを伝えることで、今回は誤解を解くことができた。



園では毎日保護者と顔を合わせる中で、良いことも悪いことも話されていると聞く。それが1年生になるとピタっとなくなる。小学校では、学校から電話がかかってくるのは何か悪いことがあったときという印象を持たれているようで、電話をすると保護者から「何か悪いことしましたか」と言われることがある。1年生だけではなく全学年で、子どもが頑張ったことや良い姿を電話して褒める『褒め電話』の取組をすることにした。



<エピソード 2 ママに言ってほしい>

私は、たつやくんが友だちとのトラブルの中で「アホ」「バカ」という言葉をよく使うことが気になり、「アホとかバカという言葉はどこで聞いたの？誰かに言われているの？」と聞くと「ママに言われている」と答えた。「言われてどんな気持ち？」「はいはいって気持ち」「じゃあ、どちらかという、いい気持ち？嫌な気持ち？」「嫌な気持ち」「お友だちもたつやくんと同じように嫌な気持ちになっているよ」と伝えると「うん」と頷いた。「アホ・バカって言わないようにママに言おうか？」と聞くと「言ってほしい」と答えた。私は以前から“たつやくんは親の顔色をうかがいながら頑張っている部分があるのではないか”“心が窮屈な思いをしているのではないか”と感じていたので、“母親に言ってほしくない”と言うだろう”と思ったのだが、そうではなかったことが意外だった。たつやくんとは、これからは友だちにアホ・バカと言わないことを約束し、母親には、たつやくんが友だちに対してアホ・バカなどと強い口調で言うことと共に、たつやくんの気持ちを伝えた。それを聞いた母親は「私が原因ですね。私の口調が悪いからです。アホとかバカとかも言わないように気をつけます」と、自分の行動を自覚され改めようとされる思いが伝わってきた。

1 学期、掃除で机運びをするときには、友だちに負けないように競争のように机を運んだり、自分で全部運べると言わんばかりに1人で力いっぱい運んだりする姿が見られた。また、2学期になり運動会の練習が始まると、女兒と一緒にダンスを踊ることに抵抗があり、練習に後ろ向きな姿があった。“友だちと協力することができるようになればよいな、男の子だけでなく女の子との関わりも増えればよいな”と思って関わっていた。

中間休みに女兒がしていたダンスの練習に、男児が1人2人と参加していくうちに、たつやくんも参加するようになった。私は「練習する人が増えて嬉しいな、一緒に踊れて嬉しいな」と喜びを伝えていると、運動会が近づくにつれて更に頑張るようになり、当日は自信に満ちた表情で踊りきった。その頃には、掃除のときに女兒から「一緒に運ぼう」と言われて、2人で机を持ち運ぶ姿が見られるようになった。「お友だちと2人で運ぶと楽に運べて早いね。お友だちと協力しているの、いいね」と言うと、嬉しそうな表情を浮かべていた。

ある日の放課後、たつやくんがとても嬉しそうに友だちと外遊びを楽しんでいるのを迎えに来られた母親と私は共に微笑ましく見ながら、たつやくんの表情が優しくなったこと、他児とのトラブルが少なくなったこと、友だちが増えたこと、女兒と協力できるようになったことなど、たつやくんの最近の様子や変容、成長を伝えた。母親も嬉しそうだったが、たつやくんの遊ぶ姿を見て「あー何かしないか心配」とつぶやかれていた。

<エピソード 3 みんなにすごいでって言ってほしかった>

3学期が始まり、国語科で冬休みの出来事について子どもたちに話をしてもらった。たつやくんは「沖縄に行つて1泊して、そこからハワイに行つて4泊した」とスピーチした。みんなから驚かれ「すごーい！」とってもらえて満足げな表情を見せていた。母親と出会ったときにその話をしたところ、ハワイにも沖縄にも行っていないことがわかった。「なぜそのようなうそをついたのか、一度家で話してみます」と帰られた。たつやくんは「みんなにすごいでって言ってほしかった」と気持ちを伝え、母親は「うそをついたらうそをつき続けるとあかん。ハワイで何をしたのか、何を食べたのかを聞かれたときにまたうそをついて、どんどん困っていくからうそをついたらあかん」と思いを伝えられるなど、しっかりと話し合うことができたことだった。私は“たつやくんの得意なことや素敵などころですごいと言われるように、学校で活躍できる場をもっと増やしたい”と思った。そして“もっともっと認めたり励ましたりする言葉かけをしよう”と思った。

<考察1>

もっともっと認めてほしい、みんなから称賛されたいというたつやくんの気持ちがわかり、学校生活の中でもっと活躍できるようにしていきたいと思った。大好きな図画工作科の時間に頑張っている姿、できた作品、体育科の跳び箱あそびの時間に活発に活動している姿をほめたり、みんなの前で紹介したりしている。

これからも友だちとの人間関係を良好に保ちつつ、たつやくんの良さを発見し、たくさんの友だちの中で遊んだり勉強したりできたらいいなと思っている。まだ友だちに強く言ってトラブルもあるが、成長してほしい。

<考察2>

たつやくんが友だちに偉そうに言ったり、強がって自分自身を強く見せたり、うそをついたりするには必ずそうさせてしまう背景があるはずだと、私は考えるようにしていた。エピソード検討を通して、たつやくんは大人から何らかの評価基準を取り込んで、それを達成しようとすることで認めてもらおうとし過ぎる点や、その評価基準に照らしてできない子を馬鹿にしたりする点があるのではないかと、自然な気持ちの動きとして“友だちに優しくしたい”“と思うより、”周りの人から認めてもらえるからそうしたい（そうしなければならぬ）”“という思いが強いのではないかと気付かされた。考察1では、できたことや頑張っている姿など目に見えるところで認めがちだったのかもしれないと振り返る。周りの大人ができたこと・できなかったことで評価するのではなく、ありのままの姿やたつやくんの存在そのもの、たつやくんの人柄を認めることが大切なのだと思うようになった。たつやくんの承認欲求をあまり刺激せず、自然な気持ちで「～したい」と思えるように心を育てていきたい。「親に叱られるから～する、ほめられたいから～する、友だちにすごいといってもらいたいから～する」といった自分軸の考えだけでなく、「～して親を喜ばせたい、友だちのために～する」といった相手軸の考えができるようになると、たつやくんの存在がもっと輝き、人間関係もよくなり、心豊かに生きていけるのではないだろうか。

保護者とは同じ思いでたつやくんを育てていきたいと思った。『褒め電話』やお迎えにこられた少しの時間も大切に、私の思いを丁寧にお伝えし、たつやくんが変容してきたことを喜び、共有してきた積み重ねが、担任である私との関係を良くしていったと思う。学校と家庭とが一緒になって、たつやくんのありのままの姿を認めていけるようになることで、たつやくん自身がありのままの自分の思いを出していけるのではないかと考える。改めて子どもを真ん中に置いた保護者との話し合いや連携が大切だと感じた。



ビー玉ぬすんじゃいました

<背景>

4年生のかいくんは、父と母、兄（中1）の4人家族。兄は場面緘黙で小学校の6年間、学校で話すことはなかった。それを両親は特に気にかけていたようだ。両親は共働きで忙しく、近所に住む祖母が帰宅後のかいくんの面倒をみる。兄とはよく喧嘩もするが仲が良く、学校でのかいくんの話にも出てくる。かいくんは、国語の自分の思いを文章で表すという苦手なことや体育の新しい遊びなどは“失敗するかもしれない”と最初から「やらへん」と逃げてしまうことがあった。

1学期、かいくんが友だちに手を出したり、言葉で攻撃したりすることが何度も続いていた。授業中の態度も悪く、床に寝転んだり突っ伏して話を聞かないことも多かった。クラスメートのまさやくんとは、そりが合わず口喧嘩をよくしていた。私（担任）は“どんな思いでいるのか、どうしたらよかったのかなどかいくんと2人で話し合いたい”と思い、その都度機会をもったのだが、かいくんが自分から話すことはほとんどなく、私が「こうやったのかな。合ってる？」と尋ねて、それにかいくんがうなずいて答えるという感じだった。事実は聞き取れるが、そのときのかいくんの思いはわからなかった。このような経験を何度も繰り返しながらも、私の思いをかいくんに伝えるようにしていた。一方的に話すことが多かったが、かいくんが私から『悪い子だ』と思われるのではないかと感じてほしくなかった。「かいくん、あのときはこういう風に思っていたんちゃう？」「やったことは良くなかったけど、先生はかいくんが優しいこと知ってるし、先生はかいくんのこと大好きやで」と伝え続けていた。かいくんは、自分が悪かったことを頭ではわかっていると思うのだが、友だちに謝ることができなかった。“なかなか自分の思いを話してくれへんなあ、どうしたらいいのかな”と私もかいくんの対応に悩んでいた。

<エピソード 1 苦情の電話から保護者との連携へ>

ある朝、まさやくんの母親から「かいくんに嫌なことを言われたりされたりするので、学校に行きたくないと言っている」と電話があった。私が両方の保護者と直接会って話を聞き、学校の先生みんなで2人の様子やクラスの様子を見守り、指導していき、定期的にどのような様子かを伝え、問題を解決できるようにしていくことで落ち着いた。それから、私は休み時間に頻りに話しかけたり、トラブルが起きたときは2人で話をする時間を設けて、話し合ったりしていく中で、かいくんが少しずつ自分の思いを話してくれるようになってきていた。かいくんの母親にも、1週間に一度くらい電話でかいくんの様子を伝えるようにしていた。その電話ではよくないことだけでなく、授業中の頑張っている様子や、友だちと仲良く遊べていることも積極的に伝えるようにしていた。

友だちとのトラブルは少しずつ減ってきていたが、まだ授業中の態度は改善されていなかった。しかし、本当にいけないことはいけないと伝えつつも、毎回注意するのではなく“ここは注意するところかな”“ここは見守っておこうかな”と様子を見ながら関わってきたことで、少しずつ態度もよくなってきた。

2学期が始まってすぐ、宿泊学習があった。そこでかいくんは、火おこしとレクリエーションの係をすることになった。“自分の仕事を最後まで務められるかな”と不安なところもあったが“自分の仕事をやり遂げることで自信がついたらいいな”と願い、わからなくて困ったということのないようにスモールステップで教えたり、班のみんなと協力できるように見守りながら、ときには声をかけたりしていた。学級としても初めての宿泊学習で、子どもたちは楽しみな反面、不安もあったようなので、私は「みんなで頑張ろう。楽しもう。みんなのこと信じてるよ」ということを何度も伝えていた。

<エピソード 2 オレのファイヤーみてよ>

宿泊学習初日の夜は、野外炊事があった。かいくんは、火おこしは初めての経験だったようだが、担当の先生の話をよく聞きながら一生懸命に火をおこしていた。また、その担当の先生は子どもたちから厳しいと一目おかれていたのだが、その先生からまず初めに「おっ、いい感じや」と褒められ、周りの友だちにも「ほんまや。すごい」と認められたこともとても嬉しかったようだ。「オレのファイヤー見てよ。めっちゃうまくいってるやろ」と嬉しそうに私に言いに来た。「すごいやん!」と私も喜び、他の先生からも褒めてもらいとても嬉しそうなかいくんだった。

今まで途中で投げ出したり、苦手なことやできないかもしれないことから逃げてしまうことの多かったかいくんが、最後まで自分の係の仕事をやり遂げられたことはとても大きな進歩だった。この頃から、休み時間に自分から私の机のところに来て、他愛のない話をするようになり、授業中も自分の席に座り活動ができるようになってきた。



<エピソード 3 ビー玉ぬすんじゃいました>

ある日、教室の教師机に1枚のノートの端切れが入っていた。開いてみると「ごめんなさい ビー玉ぬすんじゃいました。返します。かい」と書かれていた。私の知らないうちに机の中からビー玉をとって遊んでいたようだ。物をとることは決してよいことではないが、言わなければわからなかったことなのに、わざわざとったことを認め素直に謝ってきたことがとてもかわいらしく思えた。“少しずつ心を開いてきてくれるのかな”と感じ、とても嬉しかった。その後、下校時に「とったことはあかんかったけど、ごめんねって言ってくれて、本当のことを伝えてくれて嬉しかったよ」と声をかけた。かいくんは、恥ずかしそうに何も言わず、去っていった。

<考察>

かいくんの行動の奥には、家の人や私に“もっとぼくのことを見てほしい”“自分に注目してほしい”という気持ちがあったのではないかと考える。場面緘黙の兄を心配している母親の気持ちを、自分に向けたかったのかもしれない。また、4年生という心の成長により、友だちとの身体面や学習面での個人差を自覚し劣等感を感じ、自分でその気持ちをどう処理したらよいかわからなかったのかもしれないと考えた。

心の育ちはどうだったのだろうか。困った行動に、私がどう反応するのか試していたのかもしれない。自信がなく私との信頼関係も持っていないため、ひねくれた姿になって出ていたのだろう。しかし、小さなことでも良いところを見つけ認め、何度も話をして「大事に思っているよ」「大好きだよ」と伝えてきたことで“この先生は大丈夫”と感じてくれたのかもしれない。初めてすることや苦手なことから逃げていたのは兄も全く一緒だったと考え、育ってきた環境なども起因しているのかもしれない。しかし、良いところを積極的に母親に電話で伝えていたことが、親子の良好な関係づくりのきっかけになったのではないだろうか。

また、宿泊学習で自分の仕事を最後まで頑張れたことがきっかけとなり、自己肯定感が高まったり、やってみるのも悪くないなという気持ちが生まれたりしたのではないか。このぐらいの年齢になるとただ周りから褒められただけで満足するのではなく、自分で自分を評価するようになってくる。自分でも納得でき、頑張ったんだと感じられる経験であったのだろう。これらの経験が、授業にも参加できることが増えてきた

り、嫌な言い方をしてしまったとき「ごめん、ごめん」と謝る成長の姿につながっているのだろう。

トラブルを起こす子どもは、どうしても“困った子どもだ”と感じ、注意する言葉ばかりになってしまう。しかし、実際はそういった子どもほど“見てほしい”“認めてほしい”といった愛情や信頼関係を求めているのだと思う。まず、その子どもをそのまま愛することが大切なのだとは私考える。



検討例（エピソード⑧より）

検討会の様子が見られる
DVDもあります

ミニエピソード 1

- 担任は、その子の困ったことや嫌なことにばかり目が向いてしまうのかな。でもわかる気がする。そんなときはできるだけ良いところを探すようにしている。
- “かわいいと思う” “かわいいと思わない” というのは自分にはあまりない発想だ。
- “かわいいと思わない” というのは、その場だけの感情ではなさそう。積み重なったものがあるのでは。
- この子に対する周りの人の受け止め方や関わり方のボタンが少しずつ掛け違い、それが積み重なってしまったように思う。自分も近い感情を抱いたことがある。
- 強く我を通したり、長く泣く子どもにため息が出たり、受け入れるのに時間がかかることはあると思い出した。

ミニエピソード 2

- 頑張って優しく関わろうとするけれど、上手くいかないところも共感できた。
- 泣いてもなかなか泣き止めないなぎさちゃんが、時間の経過で泣き止むような姿ではなく、いつもと違った。このときの様子は、きっと印象に残る場面だったのだろう。
- 「頑張ってたもんね」と言ってもらえたら、自分ならとても嬉しい。なぎさちゃんにとってそばにいたい人だと感じられたのでは。



**いつもうまくいかないのに…
このときは、なぜ子どもの思いを深く考えられたのか？**

副園長は
すごい質問を
したね

副園長は1歩離れて
見られる立場だから
よかったのかも

一緒に見守ってくれ
る嬉しい存在

いつも職員間で
話をして
気にかけていた

担任に投げかけたことで
自分の関わりも
より深く考えただろう





いつもなら
長く泣くのに

ゆっくり思いを聞いて
もらえたなぎさちゃん
何を言ったとか
聞いたとかでなく
一つ一つの語りかけで
落ち着いたのでは…

なぎさちゃんの捉え方が
細分化されクリアになることで
意思疎通がうまくいくようになっている

「頑張ってたもんね」って
言ってもらえて
嬉しかったよね

そもそも毛糸遊びは
なぎさちゃんに
マッチしていたのかな



エピソード検討会で気付いたことを どう保育・教育に生かすか？

なぎさちゃんの
友だちへの指摘を
プラスと捉え
「ありがとう」と関わる

ビデオを撮り
客観的に見る

園内研修で保育を見合い
アドバイスする

自分の好きな遊びに
集中できるようにする

肯定的な言葉かけや
関わり方を意識する

表出方法や伝え方を
具体的に伝える

エピソード

- 人の指摘をするということは、いろいろなことに目が向くということ。肯定的に捉えたい。
- 受け止めた、寄り添ったというのが具体的に何をしたか、しっかりと分析する必要があるのでは。本当に受け止めていたのかを問う必要がある。
- 配置基準はどうか。一人一人に丁寧に向き合えるものになっているか。
- ランドセルを見せに来たときの姿と今までのエピソードの雰囲気が違う。子どもが変わったのか。保育者の受け止めが変わったのか。
- 毛糸を蹴っているのを否定的に捉えず、ただ毛糸遊びがヒットしていないと捉え、好きな遊びを探すとよいのではないか。
- 家庭のことも含め、深く知り思いを寄せることが必要だ。

子どものことを
深く知る

様々な角度からより
肯定的な見方をする

保育者同士の
チームワーク

寄り添ったつもり
になっていないか



大人はつい子どもの目に見える姿だけを見て、「成長したな」とか「まだこうしたところに課題があるな」などと評価してしまいがちです。ですが、本当は、そうした目に見える姿や行動の背後で、子ども自身が何を思い、感じ、どんな体験をしているか、そしてそれを通じてどのように心を動かす人になっていくかということが、より重要ではないでしょうか。大人から見て一見望ましい姿を見せている場合でも、ただやらされていたり、集団の流れに何となくついていったりしているだけの子どもと、自らの意志で楽しみながらそれを行っている子どもとでは、心に蓄積されていく経験の意味が大きく変わってきます。つまり、姿や行動というよりも、子どもの『心の育ち』を捉えていく必要があるのです。

心の育ちは、必ずしも目に見えるものではありません。関わる大人が身体で子どもの雰囲気の変化を感じたり、自分の目に見えないところで起こっていることを想像したりすることで、初めてその輪郭がおぼろげながらに浮かび上がってくるようなものです。目にはっきりと見えるわけでもなく、『これ』と言って名指せるものでもないようなものを捉えようと言われて、研究プロジェクトのメンバーもはじめは戸惑ったようです。

ですが、持ち寄ったエピソードについて意見を出し合い、みんなで想像を膨らませていくことで、子どもの心のありようがこのように変化しているのではないかと気付いたり、周囲の人との関係がこのように変わってきているのではないかとということが掴めたりするようになってきます。また、子どもの心が育つとはどういうことなのか、子どもの心に意識を傾けて保育や教育を行っていくということがどういうことなのか、一種の肌感覚として徐々に理解されてきます。何よりも自分と同じように毎日悩んだり、困ったりしながらも、工夫して保育や教育を行なっている実践者が他にもいるということに励まされ、子どもを育てるという重要な営みに関わっていることのやりがいや責任感を改めて感じるようです。エピソード検討会には、とても大きな効用があります。

この冊子には、研究プロジェクトのメンバーが持ち寄った貴重なエピソードが多数収録されています。自分でエピソード記述をするのは大変そうだなと思っている方も、まずはこれらのエピソードを題材に、職場の同僚やそれ以外の人たちとエピソード検討会を体験してみてください。きっと何らかの新たな気付きが得られ、普段の実践を振り返る機会になると思います。子どもの心の中でどんなことが起こっているのか、子どもの表情、仕草、声のトーンなどに対する感受性を高めつつ、その子の家庭での様子やこれまでの生育史なども踏まえながら想像を豊かにしていくこと。何よりも子どもと関わることを楽しみながら、日々工夫を重ねながら実践をしていくこと。この冊子がそのための一つのきっかけになればと願っています。

京都大学大学院人間・環境学研究科

大倉得史



第5期こどもみらい館研究プロジェクト

プロジェクトメンバー (第5期研究プロジェクト時の園所校)

メンバー

池添 鉄平 (たかつかさ保育園)
岩下 萌 (京都市立京極小学校)
太田 美佳子 (アソカ幼稚園)
川崎 哲兵 (京都市立下京雅小学校)
北川 智美 (京都市立錦林小学校)
木村 登世子 (青風幼稚園・青風和泉幼稚園)
田中 康雄 (光明幼稚園)
津田 要 (京都市久世保育所)
長坂 由美 (京都市壬生保育所)
服部 いづみ (京都市立伏見板橋幼稚園)
藤井 輝 (京都市南保育所)
向瀬 麻由佳 (京都市立みつば幼稚園)

アドバイザー

スーパーバイザー 鯨岡 峻 (京都大学名誉教授)

研究アドバイザー 大倉 得史 (京都大学大学院人間・環境学研究科教授)

事務局

こどもみらい館 柳生 和代 西田 雅代
藤本 真理代 大野 照美

表紙絵

永田 萌 (こどもみらい館館長)

令和元・2・3年度
京都市子育て支援総合センター こどもみらい館
第5期研究プロジェクト

私たちが大切にしたい心の育ちとは
～語り合いから始めよう～

発行 京都市子育て支援総合センターこどもみらい館
〒604-0883 京都市中京区問之町通竹屋町下る楠町 601 番地の1
電話 (075)254-5001
FAX (075)212-9909
URL <https://www.kodomomirai.city.kyoto.lg.jp/>

令和4年3月 発行